

足から山 物がたり



ホーイスカウト ■ 本連盟

ヤトの巻

1. 石のつぶて
2. おとりのかご

ジロツポのまき

3. 足跡を消しながら
4. なわを回して

ツキノワのまき

5. 赤い花の悪ま
6. やまつなみ

ヤトのまき

一、石のつぶて

今から千年も大昔の、天延（てんえん）という年号のころの物がたりにあります。

広い広い大空の東から、春の日が、緑の風に乗って、あたたかい光を投げながらやって来ました。

ここは、相模（さがみ）の国と駿河（するが）の国とにまたがった足がら山の高いいただきであります。

春が来たといっても、西の向こうに見える富士の山は、まだまっ白で、このとうげの山かげにも、のこりの雪が見られました。

その雪の上に、こじかの足あとを発見した金太郎は、

「ジロツボの足あとだー」

と、うれしくなりました。そして、その足あとをおって、尾根（おね）のうらまでやって来ましたが、そこからは、ふかい谷間で、谷ぞこには、酒匂川（さかかわがわ）の上流が流れていて、岩の上を流れる水は、きれいにすみ切っていました。

その谷川の切り立ったがけの上には、大きな杉の林があつて、南がわのけわしいがけぎわから、つばきの木が一本、枝を谷間へつき出すようにして、まっ赤な花を咲かせていました。

そして、このけわしいがけの、どこを、どうしておりたのか、こじかのジロツポが
コツン！コツン！

小づのの根もとを、つばきのみきへ、こすりつけていました。

しかのつのは、毎年春になると、去年からのつのがおちて、また新しいつのがはえかわります。ジロツポも、つのおちる前なので、つこの根もとがかゆくて、そうしていたのでしよう。

だが、金太郎は、ジロツポが、つばきの木に、いたずらをしているのだと思つて、

「おい、ジロツポ、がけをおりてはあぶないよ、それに、そんなに立木をいためるものではないー早く、ここへ上がつておいでー」
と、しかるようによびかけました。

すると、金太郎だとわかつてうれしくなつたジロツポが、思わず、げん気に大きくはね上がったので、かえつて、

コツン！

と、つばきの枝へ、小づのを強くつき当てました。それで、つき出た枝のさきから、咲きほこ

った花の一りんが、ほろりとおちて

ポトンと、水音を立てました。

そして、すきとるような流れのうずには、くるくるまいながら、美しいつばきの花が、向こう岸の下手のほうへ、小舟のように流れて行きました。

その行手の、大きな岩かげに、なにか、黒いけものがあります。

金太郎は、けものを見つけて、ハッとしました。

「黒い山犬だなー」

そう思つてよく見ると、山犬ではありません。黒いけものは、太っちょで、後足だけ流れにつかつて前かがみになり、岩と岩との間をのぞきこんで、右の前足を手のようにつかつて岩あなへさしこみ、なにか一心に、とらえようとしていました。

が、そのとき、けもの足もとへ、花の小舟が流れて来ると、そのけものは、これを見てゆだんしたのか、うっかり右前足を、岩あなのおくふかくへ、さしこんだようです。

「いたいつ、いたいつ」

と、ベソ声を立てて、急に岩あなから、右の前足をひきぬき、人間のように後足だけで、まっすぐに立ち上がりました。

「あつ、くまの子だ、月のわぐまの子だー」

そうです。そのけもの前首に、白い三日月がたのむな毛が見えます。こぐまは、朝ごはんのごち走に、さわがにをとらえようとしていたのです。

こぐまは、ひきぬいた足の指さきを、いたそうにふってから、ぺろぺろなめ終わると、また、もとのように前かがみになって、こんどは、用心しながらまた前足を、そーつと、岩あなへさしこみました。

が、あなのおくでも、子がにたちをまもって親がにが、青光りした大きなはさみを、ぐつと飛ばして、待ちかまえていました。

そして、こぐまの指さきへ、

「こぐまなどに、負けてたまるかー」

と、力一っばいはさみつきました。

「いたたたたつ、いたい、いたい！」

こぐまは、さわがにはさみつかれたままの右前足を、いたそうにひきぬいて、さわがにをふりはなそうと、人間の手のようにぐるぐる、強くふりまわしました。

それで、さわがには、目がまわって、山や谷や流れまで、くるくるまわって見えます。

「助けてくれー」

と、さげびましたが、頭のなが、クラクラッとして、耳のおくが、ジーンと、はげしく鳴って、なにもかもわからなくなってしまいました。

そして、ハッと、思ったときには、こぐまの指さきから、強くふりはなされて、ブーンと、半円けいをえがきながら投げとばされ

バサッと、さわがにのおちたところは、大きなくりの木の、高い枝と枝との間に、まるく作られているりすのすでありました。

すると

りすのすでは、思わぬお客のさわがにが、青みがかった大きなはさみを、ぬう　　つとおし立て、ブツブツあわを吹いているので

「たいへんだ。たいへんだー」

「天から、さわがにがふって来たよー」

りすの家ぞくは、大さわぎになりました。

それだけでなく、りすの家ぞくは、いつもくりの木の、枝から枝へと、いそがしくかけまわる運動が、大好きのようです。でも、きょうは、いつもの運動どころではありません。

特に、りすの子どもたちは、まだ見たことのないさわがにの、かたい甲らを着た横ばいのすがたが、おそろしくおそろしくて、ただもう、あちらこちらへ、せわしくにげまわって、さわぎ立っていました。

また、親子すのなかにも、一びきのおく病者の父りすがいて、

「天から、さわがにがふって来た。さわがにの、おばけがふって来たよー」

と、あわてふためいて、みきを下へかけおり、くりの木の根もとの、つみ石とつみ石との、小さいすき間へ、サツと、とびこんで行きました。

そこは、冬毛の白い野うさぎの一家が住んでいる石あなで、出入口は、やっと親うさぎが通れるだけの、せまいすき間ですが、石あなのなかは、野うさぎ一家の七わが、じゅうぶんくらせるだけの広さがありました。

野うさぎの家ぞくは、自分たちより小さい父りすには、だれもおそれはしませんが、

「天から、さわがにの、おばけがふって来た。おばけがふって来たー」

と、父りすが、そうぞうしく、さわぎ立てるので、野うさぎの父親がたまりかねて、

「りすのおとうさん、りすのおとうさん、もう少し、しずかにしてくださいませんか―」

そういつて、ちゅう意すると、

「これが、しずかにしていられますか。くりの木の高い枝にある私らのすへ―川岸に住んでい
るさわがにが、しかも、天からふって来たのですよ。そのうえ、大きな青づめをふり立てて、ブ
ツブツあわを吹いています―今に、おたくへも、そのおばけが、きつとやって来ますよ―」

「ハ、、、りすのおとうさんは、さわがにが、そんなにおそろしいんですか―」

「ハ、、、りすのおとうさんは、さわがにが、おそろしくておそろしくて、ならないんだ
つて―」

「ワ、ハ、、、―」

野うさぎの家ぞくは、みんな一しよになって、父りすのおく病さをわらいました。

「でも、川岸に住んでいるはずの、さわがにが、天からふって来る―これは、かならず、おば
けにちがいない―」

父りすは、ほんとうに、さわがにのおばけだと思っっているようです。

そのとき、こうさぎの一わは、おとなたちが、つまらないことをいつまでも、くどくどいい合

っているので、ばからしくなつて、石あなから外へとび出すと、川岸づたいにわか草の上をピョンピョンはねて行きました。
すると

谷川の流れにつき出た大きな岩の上で、つばさを休めながら、するどい目を光らせて、え物をさがしていた大わしが、こうさぎを見つけて、

「しめしめ、朝めしのさかなが、わざわざ自分のほうから、ピョンピョンやって来たー」
と、大きなはばたきの音を立ててとび立ち、するどいくちばしをとがらせ、ぐっと足のつめを聞いて、ただ一つかみにしてやろうと、おそいかかつて来ました。

で、こうさぎは、そのおそろしさに、早や気をのまれてしまつて

「おかあさんー」

助けをよぼうと思つても、のどから声も出て来ません。ぶるぶるふえながら、その場へすくんでしまいました。

また、近くの岩かげで、さわがにをさがしていたこぐまも、強いはばたきの音を聞いてふり向き、大わしのすさまじいあり様を見て、

「ぼくのほうは、大わしがとんで来ませんようにー」

と、両目をつぶって、ガタガタふるえていました。

が、そのとき、

向こう岸から、あつという間もなく、石のつぶてが、

ヒュー

と、矢よりも早くとんで来て、大わしのつばきを、ハッシと、たたきつけたので、パラッパラ
ツと、はねが七、八枚、空中へとびちりました。

こうさぎは、さあ、この間にと、ピョンピョンはねて

「おかあさん！大わしがー」

と、一生けんめい、せまい出入口から、石あなのなかへにげこみました。

大わしは、おそろしい目を、ギョロツと光らせて、

「だれだっー鳥の王様の、このおれ様に、石を投げつけるとはー」

そういつて、石のとんで来たほうを、ぐつとにらみつけました。

だが、なにを見つけ出したのか、急に、げん気がなくなつて大わしは、バサッバサッとつばきをひる返すと、遠く東にそびえて見える丹沢山（たんざわやま）のほうへ、すすごにげて行つてしまいました。

それで、こうきぎは、岩のすき間から、大わしのとび去ったのを見て安心し、みじかいしつぽをちぎれるようにふりふり、石あなのなかから出て来て、うれしそうに赤い目をくりくりさせて、

「だれが、ぼくを助けてくれたんだらうか―」

と、ひとりごとをいって、ふしぎに思いながら、向こう岸をながめました。

すると、向こう岸の、つばきの木の下で、一ぴきのこじかが、前足で、トントントンと、地面をたたいて喜びながら

「やーい！弱い者いじめの、大わし、足がら山にやって来ると、ぼくとなかよしの、金太郎さんがいるんだから―」

と、強がって、大きな声でさげびました。

この声に、こぐまも、まるい耳を立てて、岩かげからはい出し、そーつとながめると、こじかの後に、自分のようにまるまる太った人間の子どもが、ニコニコわらって立っていました。

「何者だろうーぼくのように―後足で立っているぞ―」

人間の子どもを、はじめて見るこぐまは―毛のみじかいからだに着物を着て、くまのように二本足で立って、大きなまさかりをかついでいる金太郎に、目を見はっておどろきました。

だが、こぐまは、人間の子どもの、弱い者をいたわって助けてくれたやさしい心に、感心して好きになりました。そして、こじかのように友だちになりたいと思いましたが、谷川の流れがふかくて急だし、向こう岸のがけもけわしいので、こちらからわたって行くことができません。

で、どうしたら、向こう岸へわたることができるだろうかと考えていると、
コーン！コーン！コーン！

と、谷に、こだまがひびいて

人間の子どもが、大まさかりをふるって、高い大きな杉の木の、根もとを切りはじめました。そして、根もとを八、九分通り切りこむと、今度は、両うでに力をこめて

「うーん、うーんー」

まっ赤な顔になって、杉の木を谷間へ、おしたおそうとしていました。

それで、また、いきをのんで見ていると、

メリツメリツメリツ！

はげしいひびきとともに、ついに杉の木をおしたおし、向こう岸からこちらの岸へ、どすん！！と、物すごい地ひびきを立てて丸木橋をかけました。

で、このおそろしい力を見てーこぐまも、こうきぎも、こじかまでもが、目をまるくしておどろきました。

また、野うさぎやりすの家ぞくをはじめ、あたりに住んでいるけものたちは、大きな地ひびきに地しんかと、みんなあわててすのなから、われさきにとび出して来ました。

こぐまは、今まで、この山でいちばん強い者は、自分の父ぐまだと思っていました。それは、森のきつねでも、山のいのししでも、父ぐまの一とたたきで、たたきたおされてしまうからです。

でも、あの、大杉の木を、ただ一人で根もとから、おしたおした人間の子どもの、大力には、父ぐまでも、とうていかなわなないだろうと感心していると、

タ、ツタ、ツタ、ツ

と、すぐ、こじかが、とく意のひづめで、丸木橋を、こちらの岸へわたって来ました。

そして、あたりを見まわしながら

「おい、みんな、集まっておいでーこの山で一番力持ちの金太郎さんだ。みんなと友だちになりたいってー」

と、大声でよばわりしました。

が、けものたちは、こじかの後から、二本足で丸木橋をこちらへわたって来る金太郎が、ピカピカ光る大きなまきかりをかついでいるのを見ると、みんなおそれて、すぐにはだれも、近づいて行こうとはしません。

それで、こじかは、また

「なにをおそれているんだ。金太郎さんは、やさしい人だから、みんなをかわいがってくださるよーさあ、早くよっておいでー」

そういつてくれたので、第一番に太っちょのこぐまが、流れの岩かげからノソリノソリ岸へは上がったて来ました。そして、金太郎の人のよさそうな目を見ると、まさかりのこわさもわすれて、

「ぼく、なかよしになりたいんだがー」
と、なかま入りを申しこみました。

すると、こうさぎも、金太郎の足もとへ、ピョンピョンはねて来て、

「ぼくも、友だちにして下さいー」

と、ていねいに頭をさげてたのみました。

で、金太郎は、大まさかりを立ち木に立てかけて、ニコニコしながら

「ぼくの名は金太郎、こじかの名はジロツポ、どうぞよろしくーこれからは、みんな、なかよしになろうなァー」

そういつて、あいさつをしましたが、こぐまにも、こうさぎにも、名前がありませんから、たゞ

目を、パチクリさせていると、金太郎が、しまったといった顔つきで

「すまない、すまない、君たちには、まだ名前がついていないんだなア、では、ぼくが、よい名前をつけてやろうーこぐまをツキノワーこうさをヤトとよぶことにしようーどうだ、よい名前だろうー」

「ぼく、ヤトだってー」

こうさぎには、名前の意味がわかりません。で、金太郎は、これをせつ明するように

「そうだよ、君は、野うさぎだから、ヤト(野兎)じゃないか、そして、こぐまは、月のわぐまだから、そのままツキノワとよべばいいよー」

「ぼくの名前、ツキノワか、きれいな名だが、だれよりもいちばん強そうな名前だなアー」
こぐまは、大よろこびです。

すると、そばから、こじかのジロツポが口をはきんで、

「ぼくは、二才じかだから、次郎っぼージロツポという名前なんだー」

そういつていると、金太郎が、二、三ぼ前に進み出て、まじめな顔つきをして

「だが、名前が、どんなによくても、いたずら者の集まりではこまるから、みんなよい子になるように、一つここで、やくそくしようじゃないかー」

「よい子になるやくそくだって？」

ヤトには、また、わからなくなりました。

「どんなやくそくを、ぼくらはするのかなア」

ツキノワにも、よい子になるやくそくがわかりません。

すると、ジロツポが、先ばいらしい口ぶりで

「ハ、、、君たち、あまり、むつかしく考えることはないよーぼくたちのやくそくというのは、みんなで助け合って、山や森のくらしをたのしく、いつもげん気にやろうということなんだ

と、よくわかるように教えてくれました。

二、おとりのかご

長い冬の間、はい色にくすんでいた足がら山の、山はだは、春の声を聞くと、急に尾根も谷も、一面に美しく、うすみどり色にぬりかえられました。

そして、日当たりのいい尾根の南がわで、山つつじのかたいつぼみが、あたたかい光にふくらんで、白い花びらを開くと、うら山の、じめじめしたさわのほとりでも、いちりんそうと、ふたばあおいが、うすむらさきと、べに色の、かわいい花をさかせました。

また、ひのき林のなかでも、高い木にからみついている山つぐみの、赤い花が、にっこりとほほえみました。

それから、川の水もぬるんで、春もなかばごろになると、谷川のつつみの上に、大きな葉っぱを広げている富士あざみが、むらさき色もあざやかな花を開きました。

そして、また、しばらくたって、野うさぎの石あなのある大くりの木のまわりでも、みどりにもえる草原に、きさい花のきれいなまんねんぐさと、むらさきの花の美しいたつみそうが、もう、すぐ、長雨のつゆがやって来ることを予言でもするように、あたり一面にさきそろいました。

こうして、いろいろな花が、つきつぎに、さきかわるごとに、山の動物も、きせつのうつりか

わりを知ることができました。

野うさぎの家ぞくは、小さいはこべの花が、みどりの草むらのなかに、黄色い花びらをのぞかせるようになったところから、毎日毎日、石あなから飛び出して、草と花のにおいに包まれながら、はねたりとんだり、また、親うさぎは、子うさぎたちに、てきからにげるための方法と、うさぎのしゅうかんやくらし方を、だんだん教えていきました。

そうです。うさぎは、ほかのけものと、あらそうことをこのみません。もしも、おそろしいてきに出会った場合には、すぐに、物かげや草むらにかくれて、ジグザグと風しもの方へ大まわりして、あい手の思いもよらない所から、鳥の飛ぶような早さで、自分たちのすへにげて帰ります。

ある日

子うさぎのヤトは、あまり遠くのほうまで、まわり道し過ぎて、つかれてしまったので、しばらく休んでいこうと、しゃくなげの木の間もとで、うすべに色の花をながめていると、つゆ空は、急に雨になって、ポツリポツリふってきました。

いくら、子うさぎのヤトでも、だんだん大きくなって来たので、しゃくなげの花の下では、雨やどりができません。それに、つゆ時の雨は、ふり出すと長引くので、いそいで石あなへ帰ろう

と、花の下から雨の中へ出てみると、いよいよ本ぶりになってきました。

で、ビショビショどころになりながらはねて帰ると、その帰り道のおかの上に、ぐっしより雨にぬれたひめゆりが一本、ふくらんだつぼみを、今にも開こうとしていました。

つゆの雨は、草木にとっては、めぐみの雨ですが、野うさぎたちは、雨のなかでは、運動も草かりもできません。それで、石あなのなかにとじこもって、雨の晴れる日を待っていました。

しかし、こんな間にも、さわのほとりや林の日かげの、ごみごみしている場所では、さなぎのなかから、新しい虫のなかまがうまれていました。

やがて、つゆがあげると、すぐ、山は夏です。青々とせだけをのばした草のなかから、ほたるぶくろ、やぶむらさき、つりがねにんじん、そして、ききようが、うすむらさきの花を見せてくれました。

また、ふかい草むらのなかでは、ばった、つゆむし、きりぎりす、かまきりなどが、草色をした自分たちのからだでは、だれにも見つかるまいと安心して、とんだり歌ったり、大きわぎをしていました。

だが、それも、夏の間だけのできごとで、だんだんかれはじめた草むらのかげで、すずむしや

まつむしが、さびしい声で鳴き出すようになる、あのおかにもこのおかにも、おみなえしのき
色い花がさいて、ふかいふかい谷ぞこの、岩間のところどころに、あきちょうじのうすむらさき
色をした花が、ちらほらするようになります。また、すみわたった青空に、さわやかな風がふい
て、ゆらゆらすすきのほが、しずかにゆれていました。

そして、そのころになると、足がら山にも、実のりの秋がやってきます。
で、大くりの木の枝々にも、くりの実が一ぱい、すゞなりに実のりました。

足がら山に秋がきた
き色い月にてらされて

みんなわになれうさぎの子

ペッタ、ペッタ

ペッタ、ペッタもちつきだ

ちようしあわせてきねつこよ。

うさぎのなかまは、大昔から月を、神様だと、うやまっています。

それで、ヤトは、もう、ぼつぼつ冬毛にかわろうとしている着物を、きちんと着て、お月様を
ていねいにおがんで

「ことしはどうぞ、くりの実が、ぶじに取入れできますように」

と、おいのりをしました。

それは、毎年、この月のまん月が、三日月がたにかけはじめると、となり山の矢倉岳（やぐらだけ）から、いたずらざるが数十ぴき、むれを組んでおそってきて、大くりの木の、くりの実を、一つのこさずさらっていくので、大くりの木のまわりに住んでいるりすや野うさぎや、その他のけものたちは心配で心配で、毎日毎晩集まっては、どうしたらよいだろうかと、山ざるをおっばらうそうだんを続けていました。

そこで、今日も、おしゃべりの父りすが、第一番に口を出して

「うさぎさん、うさぎさん　あんた方は、私たちとちがつて、山ざるにもまけないほどからだが大きいから、一つ、ことしは、さるどもとたたかってくださいませんかー」

と、いうので、父うさぎが、野うさぎの家ぞくを代表をして、

「でも、私たちは、平和をあいしていますから、そんなぼう力は、きらいですー山ざるだって話し合えば、なんとかうまく、話し合いができると思うのですがー」

と、父うさぎは、どこまでも平和に話し合いをしようという意見です。

だが、父りすは、小さいからだを、むりに大きく見せながら

「話し合いですむなら、とつくの昔に、話がついているはずですよーでは、仕方がありません。くりの木のまわりに住んでいられるみなさんーいいよ、山ざるどもとたたかわねばなりませんぞ！」

と、からだより大きいしっぽをふりふり、からげん気で、しかも早口で、そうさげびました。

すると、他のけものなかから

「じゃあ、私は、きのぼりができないから、木のぼりじようすなりすのおとうさんに、一番がけをやってもらったらいじやありませんか」

と、からかい半分に、大きな声でさげぶ者がありました。

これには、父りすもおどろいて、こんどは、ちぢかまるようにしっぽをまいて

「いえいえ、わたしらは、こんなにからだが小さいから、一番がけなんぞ、とんでもない、とんでもないー」

と、だんだん小さい声で、つぶやくようにいいながら、後ずさりしてかくれてしまいました。

こんなことでは、いつまでたっても、話し合いができそうもないので、きょうもまた、話が始まらないうちに、みんなは帰ろうとしました。

すると、そのとき、みんなの前へ、ヤトがピョンピョンはねて出て

「みなさん、待ってください。ぼくは、このとうげで、矢倉岳（やぐらだけ）の山ざるを、こらしめてくださる方は、金太郎さん以外にはないと思います―」

と、自信ありげに発げんしたので、みんなも思い出したように

「そうだった―金太郎さんのことをわすれていた」

「そうだ。そうだ―」

「金太郎さんに、助けてもらおう―」

「こんなときには、人間の力をかりるにかぎりますよ」

けものたちは、金太郎が、ただ一人で、長い丸木橋をかけたことを知っていたので、みんな口をそろえて、ヤトの意見にさんせいしました。

そして、みんな口ぐちに

「すみませんが、こうさぎさん、あなたから、金太郎さんに、おたのみしてくださいませんか
―」

「みんなを助けると思って、金太郎さんの家へ、たのみにいつてくれませんか―」

そういつて、ヤトにたのみましたが

ヤトは、まだ金太郎の家へいったことがありません。でも、金太郎にたすけてもらわないと、ことしも山ざるのために、くりの実を一つのこさず、みんなさらわれてしまいます。

で、ヤトは、金太郎が来るのを待っていても、いつのことかわからないので、こちらから金太郎の所へ行くことをけっ心しました。それは、丸木橋を向こうへわたれば、金太郎か、ジロツボの足あとが、のこっているだろうから、その足あとをおって行けば、金太郎の家へ行き着くだろうと思つたからでありました。

そして、丸木橋のなかほどまで、ピョンピョンはねて行きましたが、山のぼりでは、ジロツボに負けないヤトも、丸木橋の上から、ふかい谷川を見おろすと、足がすくんでしまつて、もう前へも後へも、はねることもとぶこともできません。

そして

「しまつたー」

と、思つたときは、足をすべらして、でんぐり返つて、急流へおちていました。

さあ、たいへんです。

ヤトは、まだ、およぎを知りません。流れにのまれて水をのみ、いきもつまりそうです。もがきにもがいて、流れを前足でかき、水を後足でけると、やっと顔だけが、水面にうかびあがりました。だが、少しでもゆだんをすると、すぐ頭からしずんでいきます。

で、一生けんめいに四本の足に力をこめて、水をかいたり、流れをけつたりしていると、顔も

うかんで、少しづつ前へ進んでいくような気がしました。

それで、また、げん気を出して、向こう岸へおよぎ着こうとしましたが、水をつめたきとつかれとで、足の自由がきかなくなって流れにのまれ、ついになんにもわからなくなってしまいました。

それから、しばらくたつて

ヤトは、ゆめうつゝのうちに、なんだか、ポカポカからだがあたたまる感じがしたので、目を細く開いて見ると

そこは、くまの岩屋で、こぐまのツキノワといっしょに、母ぐまにだかれてねていました。そして日なたぼっこと、せいけつずきなくまの岩屋は、南向きの岩と岩とのすき間から、キラ強い日ざしがさしこんで、ねどこのしき草も、よくかんそうしてあたたかでありました。

ヤトは、はじめ、母ぐまにだかれていたので、ちよつとおどろきました。ツキノワがそばから

「ヤトさん、どうしたのだーもう少しでおぼれるところだったよーしばらく、ぼくたちの岩屋で休んでいくがいいよ」

と、いつてくれたので、ヤトは安心して

「ありがとうございます」

そういつて、ツキノワのほうに頭をさげると、

「いや、ぼくが、助けたのじゃない　おかあさんが、流れでおぼれていた君を岸へひきよせて、口にくわえて岩屋まで運んでくださったんだよ」

と、ツキノワは、母ぐまの顔を見て、ニッコリとわらいました。で、ヤトも母ぐまのほうへふり返って

「ありがとうございます」

と、ていねいに礼をいいました。

すると、母ぐまは、

「私が、来合わせてよかったですねーで、また、どうして丸木橋なんぞ、わたろうとしなさんたんですかー」

と聞いて、ヤトが丸木橋をわたろうとしたことまで知っていたので、矢倉岳（やぐらだけ）のいたずらぎるの話をくわしくしました。そして、こんどは、ツキノワのほうへ

「ーそれで、金太郎さんに助けてもらおうと思うんだが、ぼく、どうしても丸木橋をわたることができないから、ぼくにかわってツキノワさん、このことを、金太郎さんにたのんでくれませ

んかー」

と、いって、ピョコンと頭をさげました。

すると、母ぐまも、さんせいするよう

に「このとうげの、くりの実を、よこ取りするような山ざるたちは、お前も手つだつて、こらしめてやりなさい」

と、ツキノワへ、きつくいって聞かせました。

そこで、ツキノワがかわつて、金太郎の家へいくことになりましたが、そうなる　　ツキノワの足には、立木にもほれる強いつめを持っているので、長い丸木橋でも、平気でわたつていくことができました。

が、ツキノワも、まだ一度も、金太郎の家へいったことがありません。

で、ヤトと同じように、よくかぎわけることのできるはなで、金太郎やジロツボのからだのにおいをかぎつけながら、どちらの足あとでもよいから、足あとはないかと、金太郎とジロツボが、いつもやって来る尾根の上へのぼっていききました。

くまは、いつもなら尾根の上を通るようなことはしません。かならず尾根のどちらがわか

間をいくのがしゆうかんです。だが、きようは、そんなことはいっておられなかったのです。そして、やがて、尾根の上へのぼり切ると、そこからは川向こうの遠くのほうまで、よく見わたすことができ

谷川は、くまの岩屋を少しくだつたあたりから、北のほうへ大きく折れて、川はばが広くなる、まがりくねりしてゆるりと流れていました。そして、川の手前のこんもりとした森かげから、白いけむりが一すじ、高く立ちのぼっているのが見えました。

「あつ、金太郎さんの家だつ」と、ツキノワは思わず声を立てました。

金太郎は、ツキノワから、いたずらざるの話の話を聞くと、ジロツボもよんできて、山ざるをこらしめる方法を話し合いました。

そして金太郎は、

「さるのむれが、やって来ない前に、早く、くりの実を取り入れておいて、おとりのかごを作つて、さるをこらしめてやろうと思うがー」

と、そうだんを持ちかけると、二ひきもちろんさんせいしました。

で、金太郎は、竹やぶから七、八本も、太い青竹を切ってきて、細く長く竹をわると、これで

大きなかごをあみました。また、ツキノワとジロツポは、森の中にわけ入って―ツキノワが高い木の上ののぼって、ふじづるを前足のするどいつめでかき切ると、ジロツポが木の下で、つるの根をかみ切って引っぱり、ふじづるを、なん本もなん本も、エッサエッサ川岸まで運んできました。

よろこんだ金太郎は、そのふじづるで、細いなわと太いつなを、長く長くなつて、そのなわとつなのはしを、がけに近い杉の木にむすびつけ、なわとつななどが、もつれないように丸木橋をわたって、ふかい谷川の上へ、二本のつり橋をかけました。

そして、また、細いなわのさきを、かごのつり手にむすんで、太いほうのつなは、つり手に通して、そのはしを大くりの木へしっかりとむすびつけました。

これで、仕事が終わったので、けものたちの家ぞくは、みんな出てきて
足がら山のくりの木に

いがぐりぼうずがなつたので

お山のけものはくりの実の

はじけておちるを待ちました。

と、歌いながら、くりの木のまわりを、ぐるっと取りかこみました。

そこで、金太郎は、くりの木の太いみきを、両うででかかえ

「よいさつ、よいさつ、よいさつー」

かけ声とともに、カいっばいゆさぶると、みんなの頭の上から

パラパラと、くりの実があられのようにふってきました。

さあ、けものたちは、大よろこびです。

お山のけものはくりひろい

さあさみんなでくりひろい

足がら山のくりの実は

みごとにうれてはぜました。

(曲譜スカウティング誌五五号一頁)

みんなげん気に歌いながら、取り入れにかかりましたが、

さて、くりの実を、りすや野うさぎのすへたくわえると、いたずらざるがやってきて、高い木の上のすでも、石だたみの間のすでも、たちまち、たたきつぶされてしまいます。

で、りすの母親と、野うさぎの母親は、また心配になってきて

「山ざるは、私たちの所へは、すぐ、のぼってきますから、心配なことです」

「私たちの石あななども、わけなく、たたきくずされてしまいますので」

二ひきが、どうしたらよいだろうかといった顔つきで話し合っていると、これを聞きつけたツキノワが

「では、ぼくたちの岩屋へ、くりの実をあずけなさいー山ざるどもが、おしよせてきても、とうきんぐまの一たたきで、どんな大ざるでも、たたきたおしてくれませうよ」
と、こともなげにいいました。

すると、そばから父ぐまも、

「ハ、、、、それがいい、それがいい、みなさん、くりの実は、私がかえても、かならずまもつてあげますよ」

そう、カラカラわらつて、力強くいつてくれたので、みんなは、くりの実を、くまの岩屋へあずけることになりました。

そうして、けものたちが、くりの実を岩屋へ運んでいる間に

金太郎は、いがのついたままのくりの実を、百こばかり集めてかごに入れ、さるの手首がはいるだけの、あみ目にあんだかごのふたを、ふじづるでしっかりとむすびつけました。そして

：

「さあ、できあがった」

と、向こう岸のジロツポへ、高く手をふって合図すると

ジロツポは、杉の木にむすんでおいた細いなわのほうをくわえて、テクテク歩き出しました。で、おとりのかごは

太いつなをつたわって、谷川のがけとがけとの中間へ、するする引っぱられて、ふかい急流の、ま上にぶらさがりました。

これで、おとりのかごの用意が全ぶできあがったので、一けものたちも、金太郎も、自分のすや家に帰って、その日の夕ごはんは、一年ぶりのでくりの実のごち走に、みんな舌づつみをうっていました。

が、ちょうどそのころから、急に、強い風が吹き出して、夜になると、とうげも谷も、ゴーゴ―山鳴りがして、足がら山は、森も林も、大あらしになってしまいました。

だが、そのよく朝は、すがすがしい秋晴れで、山ぎりがはれてしまうと、朝日にてらされた富士の山が、美しいすがたをくつきり現わしました。

そして、森や林から

「カッコー、カッコー」

早起き鳥のかっこうが、とうげのみんなを起こしてくれました。

ヤトも、かっこうのげん気な声に目をさまし、つみ石のすき間から、ピョンピョンはねて出て、朝のくう気をむねいっばいすうと、ていねいにおじぎをして、

「お日様、お早ようございますーお山もお早ようございますー」

と、たい陽と富士の山へ、朝のあいさつをしてから、思わず、大くりの木を見あげて、

「あつ、大きなさるがいるっ」

と、高い枝の上に、大きなさるを、一びき見つけました。

この大ざるは、物見のさるです。

毎年、秋のこのごろ、あらしのよく朝にはかならず、むれを組んでおそって来る矢倉岳（やぐらだけ）の物見の親ざるです。

さるは、昨夜の大あらしにもかかわらず、くりの実が、一つもおちていないので

「おかしなことも、あるものだー」

と、ふしぎそうに、キョロキョロあたりを見まわしていましたが、しばらくして、風に乗ってきたくりのおいをかぎつけ、おとりのかごを見つけだしました。

「あつ、向ここの、かごのなかにあるぞー」

と、くりの木からとびおりると、身がるにつり橋をつたって、かごの上にとび乗りました。

そして、親ざるが、

「キツキー！キツキー！」

一声、二声、さけび声を高くあげたかと思うと、森の向こうから

大ざる小ざるが現われて、みんなつり橋をつたってかごとび乗り、ふたのあみ目から手をさしこんで、くりの実を引っぱり出そうとあせりました。

が、くりの実をつかんだ手首が、あみ目からぬけません。

くりの実をはなせばぬける手首を、よくふかざるは、くりの実をはなさないで、かえって強くなりしめたので、いがが、手のひらへつきささって、いたくていたくてたまりません。

さるたちは、もう半気ちがいです。

で、かごを強くゆさぶって、大あばれにあばれると、それにつれて、つり橋も大きくゆれ出しました。

そのうえ、後から後へと、大ざる小ざるがやって来て、くりの実をとりあい、長いつり橋の上

で、見ぐるしいなかまあそいを、そうぞうしくはじめました。

大ざるは、小ざるをかきのけ、また、小ざるも、大ざるに負けまいと、かきあい、かみあつて
―大ざるは、小ざるをしかりつけて

「小ざるは、あぶないから、後からだ後からだ―」
と、大声でどなると、小ざるは、

「大ざるは、ずるいぞ―小ざるにも、けん利があるんだ―」
小ざるも、なかなか負けてはいません。

すると、また、大ざるが、

「小ざるのくせに、なま意気なっ」

と、大ざるばかりで、くりの実を全ぶ取ろうとするので、

「大ざるは、おうぼうだぞっ」

そう、おたがいに、口あらそいをしてから

「この、小ざるめ！」

と、大ざるに、強くけりとばされた小ざるが一びき、つり橋を、つかみはずして

「助けてくれ！」

と、さげびながら、谷川へおちていきました。

そうしたあらそいが、しばらく続くと、山ぎるの重みと大きわぎに、太いつなのつぎ目も、だんだんゆるんで、ついに、まんなかから、ぶつつりと二つに切れて

「うわっ！！」

「つり橋が切れた！」

大ぎる小ぎるは、切れたつなの両はしにしがみついたまま、じゅずつなぎになって、ドー！！と、ひびきを立ててなだれのように、みんな谷川へおちていきました。

山のさだめをまもらないで、よそのとうげのくりの実を、よこ取りしようとした矢倉岳（やぐらだけ）の山ぎるは、自分たちのよくで、自分たちがこらしめられました。

しかし、山ぎるは、およぐことができるから、急流におちても、おぼれることはありません。でも、来年からは、これにこりて、このとうげのくりの実を、よこ取りに来るようなことはありません。すまい。

ジロツポのまき

三、足あとを消しながら

くりの寒の取り入れがすむと、まもなく、つた、かえで、いちよう、ぶな、かば、なら、かきの木の葉まで、一枚一枚色づいて、足がら山は、あの尾根もこの谷も、赤、黄、茶色の美しいもみじでかざられました。

すると、ちょうど、そのころから、富士の山が、いただきの方から、まっ白な雪の衣に着がえ始めました。

そして、大空にキラキラきらめいているお星様も、今までは、地上にいっぱいつゆを落とていましたが、今度は、山のはだ一面に、まっ白いしもを落とし始めます。それで、おそ咲きの、りんどう、とりかぶと、ひめじそと言った花までが、みんなしおれてしまうと、ポツポツこがらしが吹き出して、今まで色とりどりに美しかった山々のもみじ葉も、だんだん吹き散らされて、ただ枝の先に残されたかきの実だけが、目にしみ入るように、まっ赤な色を見せていました。そして、かれて散った落葉のなかには、谷川の流れに乗せられて、さびしく流されて行くものもありました。

また、秋の間、やかましく鳴き続けていたまつむし、くさひばり、かねたたきなどの、虫の鳴き場もなくなるほど、秋草の草むらもかれはて、すっかりはだかにされてしまいました。

そのころになると、小鳥も落ち葉を木の上へ運んで行くように、山の動物たちはみんな、寒い冬を過ごすための準備や、すを作るのにいそがしくなります。また、冬ごもりのための食物をためようと、えさあさりにかかりきっている動物もいました。

やがて、とうげにも、身を切るような冷い風が吹き出すと、ちらちら雪がちらついて、寒い寒い冬がやって来ました。そして、ふり積む雪が、あの谷もこの谷もうずめつくして、森も林も、銀色にかがやく雪の花を、キラキラまぶしく咲かせました。

もう、すぐ、三才じかになるうとしていたジロツポは、雪景色をながめると、こきよりの甲斐（かい）（山梨県）の国が、なつかしく思い出されてなりません。

ジロツポの生れた所は、甲斐（かい）の国の、籠坂峠（かごさかとうげ）のふもとで、山中の湖の南がわにあるみつ林の、そのなかにある大ぼらのほらあなで、そこは、地水が暖かいので、冬でも地ごけや岩ごけが、青々と生えていて、野じかの食料には困らないよい場所でありました。

また、山中の湖は冬になると、いつも、湖のおもてを冷たい風がなせるように走って、さざな

みの音を立てていましたが、富士の山が朝日にてらされて、まっ赤なすがたを、さかさまに写していました。

しかし、ジロツボは、なつかしい生れこきよのほらあなや景色より―ふぶきの夜に籠坂峠（かごさかとうげ）をこえて、さまよいにげたそれからの、おそろしかったいろいろの旅の出来事を思い出していたのです。

それは

大ぼらのあるみつ林のおくには、ジロツボの家ぞくのほかにも、野じかのなか間が、あちらこちらでむれを組んで、楽しく暮らしていました。ちょうど、きよねんの冬のことでありました―みつ林が、銀色の雪でおおわれたある夜から、毎夜のように、このみつ林のおくへ、三国峠（みくにとうげ）の山犬が七、八つびき、連をさそっておそって来ました。

野じかにとっては、山犬は、おそろしい強てきです。年とった大じかさえ、なかまの少ない時には、山犬の足あとを見つけただけでも、遠くへにげ去ってしまうほどで、野じかのです。心配な夜が、毎ばん続いていました。

そして、今夜も、また

「ウ、、、！クオン！クオン！」
はげしいふぶきのひびきにまじって、山犬の遠ぼえが聞こえて来ました。

野じかのすでは、家ぞくを守る父じかが、夜の目もねむらず、けいかいの耳をそば立てていましたー大きな耳の野じかは、森の向こうで、木の葉の動く音でさえ、よく聞き分けることができます。

「ウ、、、！クオン！クオン！」

と、山犬の遠ぼえが、だんだんこちらへ近づいて来ると

「また、来たな」

見はりの父じかは、ねている家ぞくを、そっと起こして、

「じつと、しているんだよー」

と、ひくい声で注意すると、子じか達は、ふるえ上がって、

「僕ら、こわいよー」

二年生れたばかりの子じか達は、ガサガサ母じかの、からだの下へもぐりこもうとさわぐので、父じかは、ハラハラしてたまりかね、

「もう少し、静かにしているんだー」

と、しかりつけました。

でも、二才じかともなると、おそろおそろ大耳を立てて、遠ぼえを聞こうとする子じかもいました。

が、山犬の遠ぼえは、とうげのなかほどで、急に、ハタとやんで、ただ、ふぶきのひびきだけが、はげしく荒れくるっていました。

しかし、それは、山犬が、しゅうげきをやめたものではありません 野じかのすへ近づくと、いつものせん法の、しのびよりで、ねらった野じかのすへ、足音をしのばせて、静かに近づいていたのです。

で、しばらくすると、から松林の向こうから

「山犬だ！山犬だ！」

「みんな、来てくれー！」

と、救いを求めるけたたましいさけびが、ふぶきをついて聞こえて来ました。

さあ、なか間のさだめです。なか間が危けんになった場合、みんなで助け合って、強てきに当らねばなりません。

で、見る見るうちに、野じかのなか間は、横なぐりに吹きつけるふぶきのなかを、から松林の野じかのすへ集まって行きました。

そして、首を内に、後足で円じんを作り、そのなかに子じかを守って、強いひづめでたてがきをかまえ、しっかりと、助け合いの輪を組みました。

「用意はいいぞ、さあ、どこからなりと、やって来いー」

「これだけ、ひづめをそろえたからには、山犬なんぞに、負けてたまるものかー」
と、野じかのなか間も、元氣よく氣勢をあげました。

そうです。このひづめのたてがきにかかつては、どんなに大きな山犬でも、すぐ、けり飛ばされてしまうので、うっかりかかつては行けません。

それで、はい色の、一番年老いた山犬が、

「お前達半分は、うら手の方へ回れー」

そう、さし図すると、山犬達は、二手に分かれて

「よし、僕達は、うらがのげから、野じかの頭ごしに飛びこんでやるー」

と、その一手は、から松林のうしろにあるがけの上へ、ふぶきに向ってよろめきながら、ぐるっと大回りして行きました。

そして、ふぶきのくるうがけの上から

「ウォー！ウォー！」

おどしのおなり声を、ほえ立てたかと思うと、パツと、金ちゃ色の、たくましい山犬が、先頭を切って、野じかの頭ごしに円じんのなかへ、サツと飛びこんで行きました。

続いて、二ひき、三ひき

山犬は、だんがんなような勢で、はげしいとつげきを開始しました。

それで、助け合いの輪を組んでいた野じか達も、山犬が、頭ごしに輪のなかへとびこんで来ると、強いひづめのたてがきも、もう、なんの役にも立ちません。たちまち方向転かんです。

すると、そのすきをねらって、林の正面からも、うら手のこうげきをたすけるように、五、六つびきの、若い元気な山犬が、年老いた山犬に連れられて、とぎすました白いきばをそろえ、するどくしゅうげきして来たので、野じかの円じんは

「わあー！」

と言った一さわぎして、あつけなく、そうくずれになってしまいました。

で、子じか達は

「おかあさん！こわいよー」

「おとうさん！助けてー」
と、泣きさげんで、にげ回りました。

そして、その時でした。

あつ、あぶない！

ぶち毛の若い山犬が、きばをむき出し、一ぴきの子じかめがけて、まっすぐに飛びかかって来ました。

が、子じかが、サツと、からだをかわすと、若い山犬は、もんどり打って、ドサツとたおれてしまいました。

「アハ、、、！おかあさんー山犬が、でんぐり返ったよー」

と、元気にわらったこの子じかは、後にジロツポと呼ばれるようになった二才じかで、むれ一番の元氣者です。

だが、母じかは、ハラハラして

「また、来るから、子じかは、早くにげるんですー」

と、しかつても

「う、ん、僕、ちつともこわくないよー」

と、二オじかは、にげ出そうともしませんから

「この子、なに、言うんですー早くにげるんですよー」

そう言いながら母じかが、やっ気になって、二オじかをにがそうとしている間に、す早くとび起きた山犬は、また、らんらんとかがやく目で、ぐっと二オじかをにらみつけて、こうげきのし勢を取りもどし

「よくも、赤はじか、せたなー今度こそ、許さんぞー」

耳もさけんばかりに、大きく口を開いて、白いきばをとがらせ、ふたたび飛びかかろうとかまえました。

が、母じかの、

「おとうさん、二オじかがー」

助けを求めるそのさけびが終わるか終わらないうちに、タ、タ、タ、と、父じかがかけよってこの山犬めとばかり、大きな枝づので山犬の、横っ腹の下からすくい上げ、

「この子を、取られてたまるかっ」

と、全身の力をこめて

「えい！」

かけ声といっしょに、とげのいっばいのがったいばらのぼさへ、たたきつけるように投げ飛ば

すと、若い山犬は、

「キャン！キャン！」

鳴きながら、いたそうにしつぽをまいてにげて行きました。

おすじかのつのは、他の動物と争うためのものではありませんが、子じかの命には代えられなかつたからでしょう。

しかし、また、その夜も、山犬達のために、から松林の子じかが、かわいそうに二ひきも、うばい去られました。

そうした山犬のしゅうげきが、夜ごとにはげしくなるにつれ、このあたりの野じかのむれは、みつ林のすをすてて、だんだん旅へ出て行く者が多くなって来ました。

で、ジロツポの家ぞくも、それから三日目のばん、山も谷も湖も、どこもかも、吹きつける雪けむりで見通しのきかないやみにすがたをかくして、ふり積む雪に足あとを消しながら、父じかが先頭に立って、道を南にとってにげ出しました。

だが、山犬のおそろしいついせきは、にげ出して行く野じかをつけて、どこまでもどこまでも追っかけて来ることを、年とった父じかは、よく知っていたのです。

山犬は、野じかの足あとが、雪のために消されても、よくかぎ分けることの出来る鼻で、野じ

かのおいをかぎつけながら、追っかけて来ることでしよう。

それで、父じかは、家ぞくを連れて、ぎやくに籠坂峠（かごさかとうげ）の尾根へ一風に乗った雪が、鼻のあなや目のなかへ吹きこむので、吹きおろすふぶきの方に半分せなかを向けるようにして、時々前足で鼻先やまつ毛の雪をかき落しながら、やつのことで登って行きました。そして、急に、南がわの山犬も通れぬようなければいけないがけの、雪ですべる岩かどを、横渡りにつたって、深い深い谷底へ飛びおりてしまいました。

やがて、夜が明けると、雪も止んだので、昼間の明るい間は、じーっと谷底の、みつ林のなかにかくれていました。が、また、夜が来て、すっかり暗くなると谷底を流れている小川の、氷がこびりついて、するするすべる岩から岩へ飛び渡って、こんどは、向こうがわの尾根へ、鳥の飛ぶようにはやきで、ぐんぐん一気に登ってしまいました。

そして、尾根の上まで登ると、星空が一面に広く開け、キラキラ星がまたたいて、北斗七星（ほくとしちせい）もはっきりと見られました。

「あつ、お星様だー」

二才じかは、暗やみの谷底から出て来たことが、うれしくてうれしくてなりません。

母じかも、ほっとして

「どうやら、あしたは、よいお天気の様子ですねー」

と、父じかに言いました。

が、父じかは、これを打ち消すように、

「だが、今のわし達には、一寸先も見通しのきかないふぶきの方が、かえって、ありがたいのだがー」

父じかは、いつなん時、山犬が、飛び出して来るかも知れないので、まだ、なかなか心を許してはいません。

「でも、夜風が、こんなに吹いていますから、私達のおいも遠くへ飛び散って、少しは、安心じゃありませんかー」

「なあに、このへんでは、まだまだ、安心することは出来ないよ、さあ、少しでも早く、夜の明けないうちに、南のふもとへ下ってしまおうー」

そう言う父じかの言葉に、みんなは急いで尾根を下ると、こんどは、山犬のほらあなのある三国峠（みくにとうげ）のふもとをさけて、ぐるっと遠回りして、また、明神峠（みしようじんとうげ）をも上り下りして、東の空の白らむころには、酒匂川（さかわがわ）の上流へたどり着きま

した。

ここまで来ると、山がひくいので暖かく、雪も氷もとけて、春のような感じがしました。で、子じか達は、からだを母じかにすりよせて

「おかあさん、こちらで少し、休んで行こうー」

「僕も、足がつかれたー」

子じか達は、長い旅のつかれで、口ぐちにそう言ってせがみましたが、こうした旅のけいけんを、たびたび持っている父じかは、ふぶきで足あとをかき消し、風でにおいを吹き散らし、こんな遠い所までやって来ても、まだ山犬のついせきから、完全にのがれ去ったとは思われません。

で、父じかは、子じか達を元気づけるように

「みんな、もう少しだから、もう、一ふんばり、がん張るんだよー」

と、きつく言いつけると、横合いから母じかが、子じか達へ助け舟を出して

「じゃア、元気に川を渡った者から、向こう岸でしばらく、休ませてやることにしましょうー」

と、父じかへ、そう言ってくれました。

それは、この長旅では、初めて旅をする子じか達にとっては、大変なことだろうと心配した母

じかの心やりからでありました。

で、この母じかの、助け舟に元気づいた子じか達は、われ先にと、ザブザブ流れを渡って、足がら村に近いつつみの上へ登って行きました。

すると、そのつつみの上には、野じか達のすきな川やなぎの木やくわの木が、あたり一面に生えていました。が、まだ春が遠いので、葉を落とした枝の先の新しいめは、小さくかたくてめを吹いていません。ただ、つばきの木が、二、三本、早咲きの白い花を、美しく咲かせていました。

それで、母じかは、父じかに

「子じか達も、お腹をすかしていますから、何か食べ物をもー」

と言うと、父じかも仕方なさそうに、

「それじゃ、私も、何かさがしてやろうかー」

と、父じかと母じかだが、あちらこちら食べ物を探していますと

それを待ち切れないで、子じか達は、つばきの木に近づいて、冬にもかれないつばきの青葉をむしり取ろうとしました。

これを見ておどろいた母じかは、すぐ、子じか達の方へかけて来て、

「つばきの葉は、すじがかたいから、食べるとお腹をこわしますーそれは、昔から、しかの食

べ物じゃありませんー食べてはだ目ですよっ」

と強く言って、首を横に大きくふって見せました。

母じかにしかられた子じか達は、

「ごめんよ、ごめんよー」

と、ベソをかきながら、しりごみしましたが、また、こんどは、つつみの上に、大きく枝を張ったえのきのみきに、ぐるぐるからみついているあけびの、かれそうにしわひた太いつるを見つけてきました。

それで、二才じかが、一番にかけ出して、かれづるをかじろうと、えのみきに近づいて行くと、さつきから、えのきの枝にかくれて、子じかをねらっていた大きな金茶色の毛なみをしたてんが、ふいに、二才じかの、のどもとめがけて、サツと、おそいかつかて来ました。

が、ねらいは外れて、二才じかのかた先を、ガックと、するどいは先で、かみつきました。

「いたいっ、いたいっー」

二才じかが、悲鳴をあげると、しゅう圀の子じか達は、思わず、パツと、みんな後へ飛び散りました。

だが、父じかと母じかはタ、ツと、すぐかけて来て、父じかは、

「この大づのが、目にはいらぬのかっ」

と、大きな枝づのを、ぐつとかまえて、てんをおどしつけました。
てんは、大づのにおどろいて、

「うわあ、こりや、かなわん」

そうつぶやくと、たじたじ後ざりして、向きを変えたかと思うと、すぐ、ガサツガサツと、もとの木の枝へ、素早くかくれてしまいました。

前にも言ったように、父じかの大づのは、他のけものと争うためのものではありません。おすじかを表わすためのものでありますから、あい手がにげれば、それでよいのです。父じかの方から追って行くようなことはしません。それよりも、てんにかまれた二才じかの、きずの手当てが大切です。

で、母じかは、二才じかを急がせて、

「きずは、すぐ、きれいな水で洗わなきあー」

と、鼻先で、二才じかを小川までおして来て、流れなかへ横にねかせ、ジャブジャブきず口を、きれいに洗ってから、ペロペロした先で、きず口につばをつけてやりました。

けものつばは、きずのためによい薬で、さつきんぎいの代りになるのです。

やがて、きずの手当てが終わると、また、父じかを先頭にして、野じかの家ぞくは、谷川ぞいに、しいの木やならの木の、ぞう木林をぬうようにして、すがたをかくしながら、上手へ上手へ進んで行きました。

が、二才じかは、かたのきずがいたむので、家ぞくから少しおくれて、ビッコをひきひきついて行くと、母じかが、心配して、時々後帰りして来ては

「さあ、もう少し、元氣を出すんですよ、いつものお前らしくもないではありませんか」と、頭で後から、おすようにして助けてくれました。

そこで、二才じかも、家ぞくからは、あまり遠くへはなれずに、みんなと一しよに、滝の下手の所までやって来ることが出来ました。

すると、その滝の下手は、尾根と尾根にはさまれて両がわとも、急に、切り立った深いがけになっていて、こちらから向こう岸へ、長い杉の丸木橋がかかっていました。

父じかは、この丸木橋を見ると、

「かあさん、近くに、人間が住んでいるから、用心するんだよー」
そう母じかに、そっと耳打ちすると、

「そうですね、こんな所に橋がかかっているのは、人間が近くに住んでいるしよこですねー」
と、母じかも、心配そうな顔つきをするので、父じかは、

「では、下手へもどるか、それとも、このまま上手へ登って行くか、どちらにするー」
そう相談すると、

「せっかく、ここまで来たのですから、このまま登って行きましょうー」

と、母じかの言葉に、相談がまとまって、二才じか以外は、子じかもみんな、その長い丸木橋を渡りました。

それは、野じかのひづめが、ふたまたに分かれているので、どんなまろい一本橋でも、平気で渡ることが出来たからです。

だが、ビッコの二才じかだけは、かた足とびでは危けんで、この長い丸木橋は、どうしても渡れそうありません。

で、二才じかは、

「おかあさん、待ってー」

いつもは、元気者でも、家ぞくが向う岸へ渡ってしまうと心細くなって、半泣き声で呼びとめました。

母じかも、こまったと言った顔つきで、

「おとうさん、どうしましょうー私達では、渡してやる事が出来ませんー」

この母じかのオロオロ声に、父じかも、

「弱ったな、なんとかいい方法は、ないものだろうかー」

と、いくら考えてみても、しかの力では、丸木橋を渡してやれそうもありません。と言って、二才じかを残して自分達だけで、これ以上進んで行くことも出来ません。

で、母じかは、父じかへたのむような目つきをして

「二才じかには代えられません。橋をもどることにしましょうー」
と、言いました。

それで、みんなもあきらめて、橋をもとへもどりかかると

その時、下手の川ぞいの坂を、よく太った人間の子どもが、しばたばを山のようにかっいで、二才じかのうしろの方　橋のたもとまで登って来ました。

おどろいた野じか達は、

「あつ、人間がやって来たー」

と、みんなににげ出そうとしました。

が、橋向ここの人間の子どもが、二才じかをかかえ上げようとするので、母じかは、たまりかねて

「おとうさん、二才じかが！」

と、のどもさけるような声でさげびました。

が、父じかは、その人間の子どものおだやかな目を見ているうちに、けもののかんで、この子どもは、野じかをいためるような悪い人間ではないように感じて、

「まあ、そう、さわぐものではない」

と、言い聞かせているうちに 人間の子どもは、やさしく二才じかをかかえて、こちらへ丸木橋を渡してくれました。

で、父じかと母じかは、かけよって

「ありがとうございます」

「おかげ様で、二才じかが助かりました」

と、二ひきが、かわるがわる礼を言うと、人間の子どもは、二才じかを地面におろしてやって

「この子じか、二才じかだねージロツポだなー僕、金太郎と言う者だが、心配せずとも、君達をとらえたりはしないよーさあこの滝の上の川原に湯が出ているから、ジロツポのきずを、よく暖めてやると、すぐよくなる。早くそこへ、連れて行ってやるがいいよ」

「えっ、この滝の上に、きずによく湯が出ていますってー」

父じかが、そう言って聞きただすと、母じかもそばから

「それなら、おとうさん、早く二才じかを、そこへ連れて行ってやりましょう」
と、どちらも、温泉のことをよく知っているようです。

そうです。けものや鳥のなか間は、地面の底からわき出る温泉が、きずや病気のために、大変よくきくことを、大むかしから自ぜんに知っていたのです。

「それじゃ、この坂を左へ登ると近道だから、早く連れて行ってやるがいいよー」
と、金太郎は、道を指さしながら教えて

「さあ、僕も、おそくならないうちに帰らないと、おかあさんが心配するー」

そう言い残すと、野じか達へ教えた道と反対に、坂道を右へとって、元気よく登って行きました。

その金太郎を見送りながら母じかは、

「人間にも、ほとけ様や神様ののように親切な子がいるんですねーで、あの子の名前、なんとか

言いましたねーそうそう、金太郎さんとか言いましたー」

と、うれしそうに言うと、父じかは、自分の感じは、間ちがっていなかったと言った口ぶりで

……

「人間がみんな、悪者ばかりとはかぎらないよー私は、あの子の目を見た時から、なんだかよい子だと感じていたーそれに、あの子は、二才じかのことを、ジロツポとか言ったようだったなー私達も、これから、二才じかのことを、ジロツポそう呼ぼうじゃないかー」

「それがいいですね、二才じかのために、おん人が、つけて下さった名前ですものー」

「うん、そうしようしよう。これからは、みんなにも、そう呼ばそうーでは、早く、滝の上まで急ぐことにしようじゃないかー」

と、にげかけた子じか達を集めて、左がわのがけ道を、滝の上手へ登り切ると、広い川原へ出て来ました。

すると、ふいに、目の前の草むらから、バタバタと羽ばたきの音が聞こえたかと思うと、この鳥が二羽、パツと飛び立って、りっぱな白いつばさを広げ、高い一本松の一番上の枝に作っている自分達のすへ、ゆうゆうと飛び去って行きました。

そして、その草むらから、ほかほかと湯気が、白く立ちこめていました。

「あつ、湯が出ているー暖かそうな湯が、あんなに一ぱい出ているー」
父じかは、温泉を見つけて、思わず、大声でそう言いました。

母じかも、それから、ホツとしたように

「これで、ジロツポのきずも、すぐなおせますーきっきの、この鳥も、どこかからだが悪いので、暖まっていたのでしょー」

と、もう、ジロツポのきずがなおったような喜び方です。

そこで、父じかと母じかは相談して、いつそのこと、この川原の向こうの、はぜの木やかえでの木のチラホラ見えているぞう木林に、わし達のすを作ろうかと話合いましたが、なお、あたりを見回していると、一段と深い草むらのかげに、思いもよらない小屋がけがありました。

その小屋は、人間だけが持っているーは物と言うものを使って、森から木を切り出し、柱を建てて横木を渡し、雨つゆのかからないように、かやの葉で屋根をふいて、また、寒さや風をふせぐためにしゅう囲にかこいまで作ってありました。

そして、小屋のなかには、川原の石を積んで湯つぼを作り、温泉のわき出ている所と川の流れから、太い竹のふしを通して、二本のといを渡し、温泉と水とを湯つぼへ流しこんでありました。

それで、母じかは、足先で湯かげんを知ると、

「ジロツポを、ここでゆっくり暖めてやりましょう」

と、ジロツポを湯つぼへ入れようとしたが、父じかは、声をひくめて、

「この小屋は、人間の作ったものだから、早く暖まって行かないと、人間に見つかれば、とらえられるかも知れないよ」

そう言つて、他の子じか達にも、早く湯へはいるようにせかせました。

で、母じかも、急いで、自分の鼻の先でジロツポのからだをおすようにして

「さあ、早く、きずを暖めなければ、人間が、お前を取りに来ますよ」
と、言いながら

親じかが、ニひきして、早く湯へ入れようと思いますが、子じか達は、初めて見る湯気におそれ、なかなか湯つぼへはいろうとはしません。

そのうえ、なに思つたのか、ジロツポは、母じかの下をかくぐるようにぬけ出して、小屋の柱と横木とを結びつけてあつたふじつるをかみ切つたので、バサツと、小屋が、横にたおれてしまいました。

びっくりした母じかが、

「これ、ジロツポ」

と、言うのもまたないで、父じかも、

「お前、なにをするのだっ」

と、思わず、声を大きくしました。

しかし、こうなると、しかの力では、小屋のしゅうぜんが出来ませんから、人間に知れないうちに、早くにげ出そうと思って、父じかと母じかは、すぐ、子じか達を連れて小屋から飛び出しました。

が、父じかは、この小屋がけをした人間が、小屋をたおしたことを知れば、かならず自分達をとらえに来るだろうと心配になって

「人間に見つかると大へんだから、みんな急いで、川原を走るんだ」

そう命れいするように言うと、みんなもおそろしいのか、つかれていた子じか達まで、小石のゴロゴロ多い川原をピョンピョンかけて、ぞう木林のなかへ、すがたをかくしてしまいました。

そして、ぞう木林のなかでも、足あとを残さないように、ところどころ雪の残った深い落ち葉の上の雪をさけながら、林の向こうへつきぬけると、そこは、高いがけの下で、そこからは、急にけわしい尾根がせまっていたので、父じかと母じかは、もう歩くこともいやがる子じか達を連

れていては、この尾根ごえは無理だと思つて―尾根のすそにそつて、子じか達をしかりながら追
い立て追ひ立て、日当たりのいい雪のとけた道を、自分達の足音を気にしながら、しばらくみん
なで進んで行きました。

すると、その行手をはばむように、尾根のすそから一面に、せたけよりも高いささむらが、う
つそうとおいしげだったので、もうこれ以上進むことが出来なくなつてしまいました。

それで、野じか達は、ちよつとこまつていましたが、あちらこちらかけ回つた父じかが、その
ささむらの地面を二つに分けて流れている細いさわの流れを見つけ出してくれたので、みんなは、
ささむらの下をくぐるようにして、浅いさわの流れをさか上つて行くと、思いもよらないくぼ地
にぬけて来ました。

そして、そのくぼ地は、尾根に続く北がわに、かえでの木のいっぱい立ちならんだ丘があつて、
東と西と南の三方は、高いささむらが、深いかき根を作っているように、ぐるつとくぼ地を取り
かこんで、くまさが、冬で黄色くなつていましたが、のぞきこむすき間もないほどはえていた
ので、外からは少しも分かりません。で、ここなら、そうかんたんに、人間や山犬にも発見され
ないだろうと思ひました。

また、南がわのすみには、秋の末ごろから散り始めたかえでの葉が、丘の上から吹きよせられて、ちようどよいねどこまで出来ていました。

そこで、父じかと母じかが、なおもよく、あたりを調べてみると、丘の向こうがわと尾根との分かれ目の、がけとがけとの岩の間からわき出ているいずみの水が、にじむようようにくぼ地へ流れこんで、また、ここでも、いくつかの、きれいなさわを作っていて、飲み水はじゅう分だし、一番下の水だまりでは、からだを洗うことも出来ました。そして、さわのほとりがしめっているので、まだ冬だと言うのに、地ごげや、岩ごげが青々と、ささむらの下まで生え広がっていました。

で、父じかは、

「ここに、わたし達のすを作ろうと思うが―」

と、相談を持ちかけると、母じかも喜んで

「ここなら、いいでしょう　冬の間でも、家ぞくの食べ物には不自由しませんもの」

「そうだよ、それに、さわの流れをにごさないよう通って出入りすれば、足あとも残らないから、こんな深いささむらのおくに、わし達が住んでいるとは、人間も山犬も気がつくまい　また、夏には、さわのどろや、すなをからだにぬって日にかわかせば、蚊やぶよなどの、悪い虫を

ふせぐことも出来るーこゝは、わし達野じかのすを作るには、またとないよいくぼ地と言うもの
だー」

そう言った父じかは、三日ぶりで、少し気もほぐれて、ほがらかな気分になったようです。

四、なわを回して

野じか達が、くぼ地にすを作った初めの間は、ジロツポは、まだきずがいたむので、いつも母じかのそばでうづくまっていたましたが、十日あまり過ぎると、ジロツポのきずは、もとのようになおってしまいました。

そうになると、いつも元氣なジロツポは、くぼ地などで、じっとねてはられません。

いたずら子じかのジロツポは、

流れの水でジャブジャブと

きれいに毛なみを洗ったが

どろんこごっこでどろまみれ

さあ 大変 しかられる

ヒーヨヒーヨ ヒーヨヨ

いたずら子じかのジロツポは

すました顔して森の道

ひづめ自まんてかけ過ぎて

かあさん所へ帰れない

さあ 大変 どうしよう

ヒーヨヒーヨ ヒーヨヨ

(曲譜スカウティング誌五八号一頁)

こんな平和な日が、いく日か続くと、急にかけ足で春がやって来たように、雪や氷がとけ始め、滝の流れが、ひびきを立てて春を呼んでいました。

だが、野じか達は、ここへ来てからまだ、一度も人間に出会ったことがありません。それで、みんな人間をけいけいしながら、若草をさがして、温泉の出る川原のつみまで出て行きました。そして、父じかだけで、もつとあたりの様子をよく知っておきたいと思つて、つつみづたいに川を少しさか上がつてから、ジャブジャブ水かさの増した川原を向こ岸へ渡ると、そのつつみに続いた丘一面に、人間のたがやした広い畑がありました。そして、まかれた種が、春を知ったのか、土の下からむくむくと、強い力で地面を持ち上げようとしていました。

で、父じかが、

「もう、すぐ、春だなあー」

と、思いながら、暖かい空気をむね一ぱいにすつていと、いつからついてきたのか、父じかの後から、いきなりジロツポが飛び出して、畑のなかまではいつて行こうとするので

「畑へ、はいってはいけないー畑を荒らすと、人間が、しかりにやって来るーお前は、川原

の湯で暖まって、一日でも早く、きずあとをよくするのだぞ」

父じかは、そうしかりながら大づので、ジロツポのからだをおすようにして、川原の小屋までもどってきました。そして、よく見ると、小屋は、ジロツポが、こわしたままだと思っていたのに、もとのようにしゅうぜんしてありました。それで、だれが、しゅうぜんしたのであるうかと、ふしぎに思いながらも、小屋の近所で待っているはずの家ぞくが、一びきも見当たらないので……

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

声をはり上げて、家ぞくへ合図をしました

「ヒーヨ！ヒーヨ！」

こだまが、帰って来るだけで

「」

家ぞくからは、なんの返事ありません。

それで、父じかは、心配で心配でたまりません。ジロツポを湯に入れるひまもなく、けん命になつて家ぞくのおいと、足あとをさがして、あちらこちらとかけ回りました。

そして、ようよう父じかは

「あつ、足あとだー」

と、滝の横道に、野じかの足あとを発見しました。

が、どうしたことでしょうか、大きな山犬の足あとが、野じかの足あとと入りみだれて

「一っぴき、二ひき、三びきー」

さあ、大変です。

三国峠（みくにとうげ）の山犬が、足がら山の滝の上まで、野じかの足あとを追って来たのでしよう。とすると、野じかの家ぞくは、どうなっていることか、このままです、おけば、どうされてしまうか分かりません。

と言って、年とった大きな父じかでも、なか間の協力がなにかぎり、三びきの山犬にはかきません。しかし、父じかは、家ぞくのしどう者です。家ぞくを見ごろしにすることはできません。危けんをおかしてでも、みんなを救わなければなりません。

そう決心すると、父じかは、ただ、家ぞくを助けたいために、む中になって家ぞくの足あとを追って、滝の横道を一散にかけおりて行きました。

父じかが、いなくなってしまうと、いつも元氣者のジロツボも、急に心細くなって

「おかあさんーどこへ行ったんだー」

と、泣き出してしまいました。そして

「僕、一びきになってしまったて、さびしいよー」

と、父じかの後から、けわしいがけ道をおそるおそる一步一步用心しておりて行くと、ちょうどその下は、滝つぼでゴーゴー雪どけの水が、高いしぶきを立てて落ちていました。

こんな大きな滝を初めて見るジロツポは、なんだか滝つぼへ、すいこまれてしまいそうな気がして、冷たいしぶきがかかると、首をちじませて、ぶるぶる足までふるえて来ました。

そして

「おかあさんー」

と、また、大声で泣き出しました。

だが、ジロツポは、子じかでも、けもの習せいで、家ぞくの足あとだけは見落とすまいと、大きな目をまるく開いて、足あとをさがしながら行くと、がけに続いた山と山との間に、細い用水路があつて、滝つぼから水が流れ出していました。

そして、用水路に両がわから、ぞう木や、さ、むらがおおいかかつて、昼でもまっ暗なズイド

ウになっていました。また、用水路には、深く落ち葉が重っていて、その下をくぐるように、きれいな水が流れていました。

よく見ると、その水をにごらせて通った野じかや山犬の足あとが、落葉の上にくすくす残っています。

ジロツポは、見うしなつたかと思っていた足あとの続きを発見したので

「おやっー」

と、思つて、ズイドウのなかをのぞいて見て

「まっ暗やみだ」

と、ちよつとしりごみしました。

だが、すぐ、その後から、子どもらしいこうき心がわいて来て、思い切つてザブザブ、曲りくねつた用水路をおそろおそろ進んで行くと、急に目の前が、パツと明るくなって、まぶしくてまぶしくて、思わず目を閉じてしまいました。

が、しばらくして、そつと目を開けて見ると、そこは、ズイドウの向う口で、その外では、三びきの山犬と人間の子どもが、はげしいたかいたか始めていました。で、ハラハラさせられながらもよく見ると、その人間の子どもは、自分をいたわつて、丸木橋を渡してくれた金太郎だと

分かりました。

それで、じーっと息をのんで見守っていると、金太郎は、じょう夫なふじづるの先に、石のようにかたいかしの木のぼう切れをしっかりと結びつけて、それをぐるぐる水車のようにふり回して、山犬どもを追っばらおうとしていました。

強い力の金太郎が、カ一ぱいふり回すぼう切れに、三びきの山犬は、どうすることも出来ません。ただ、とぎすましたは物のようにするどいきばをむき出したまゝ、遠巻きにうなるだけで、ぐるぐる生きもののように回るぼう切れを見ると、自分たちの目まで回ってしまいそうです。

山犬どもにとっては、人間の金太郎よりも、ふじづるの先のぼう切れが、おそろしくおそろしくてなりません。

ちよつとでも油だんをすれば、すぐ、ぼう切れが飛んで来るので

「ハ一ア、ハ一ア一」

荒い息をつきながら、少しの休みもなく自分達の目も、ぐるぐる回していなければなりません。それで、山犬どもは、だんだん気がくるいそうになって来ました。

それで、若い方のぶち毛をしたおす犬は、もう、しんぼうできなくなつたのか、

「ウ、、！」

と、きばをかんでねらいをつけ、ブルンと身をふるわせたかと思うと、パツと一ペんに、自分のからだの五、六ばいも飛んで、遠くからぼう切れへ、サツとかみついで来ました。

が、それと同時に、

「えいっ！」

かけ声するどく、金太郎も、ふじづるを持った手首を、グツと急に、一たぐりたぐりました。すると、ぼう切れが、山犬の横つつらを、カーンとたたきつけたので

「キャン！キャン！キャンー」

悲鳴をあげて山犬は、そこから十二、三メートルもはなれた太いみきのいちよの根もとまで、からだごとはね飛ばされてしまいました。そして、しばらくは、ぐったりたおれたままで、すぐには、起き上られそうもありません。

これを見るとー今まで、きばをむいてうめきながらも、じっと一と所に立って、ただ目だけ光らせて、回るぼう切れをにらんでいた母犬らしい、まっ黒な毛の山犬は、らんらんと光る青い目を、一そうするどくかがやかせて

「よくも、むす子をー」

と、首の毛をさかだて、ぼう切れの回る速さに

「ハアア ハアア」

息を合わせていたかと思うと、

サツと、急に大きく飛んで、カクツと、ぼう切れにかみつきました。

が、けんのようにするどいきばでも、石のようにかたいかしの木のぼう切れは、かみくだくことが出来ません。それどころかかえってきょう犬のようにかみついた自分の力で、ポキッときばが、根もとから折れてしまつて

「キャン！キャン！」

と、一声 二声、鳴き残して、すぐ一目散（いちもくさん）ににげて行きました。

で、ジロツボも、少し安心して、ズイドウのなかから出て見ようと、二、三步あるきかけると、ふいに、パツと目の前を、黒いかげが通り過ぎたので、思わず首を、ハツとちじめました。

が、よく見なおすと、そのかげは、はい色をした大きなおす犬で、初めは、おれが年寄りでも、けいけんがあるから人間なんぞに負けないぞ、と言つたおごりを顔にうかべ、金太郎を、ぐつとにらみつけたまま、くんくん鼻を鳴らして、ぐるぐる金太郎のしゅう囲を回っていました。

だが、この父親らしい山犬は、二ひきの失敗を知っているのです、なかなかすぐには、おそいかかって行こうとはしません。

と言つて、にげれば、すぐ、ふじづるがのびて来て、ぼう切れにたたきつけられるので、進むこともしりぞくこともできなくなっていました。

しかし、しばらく、ぐるぐる回っているうちに、犬の習せいも手つだつて、むやみにかみつきたくなつたのか―でも、そこは、老犬のこととて、長年のけいけんで、

「うー」

と、一うなりうなるとはやてのように、す早く飛びこんで、あつと言う間に、サツと、ぼう切れにかみつきました。

が、金太郎は落ちつきはらつて、少しななめ横にふじづるを、だんだん早く強く回したので、山犬は、ぼう切れをくわえたままちゆうにういて、ぐるぐるふり回され、その速度が加わると、クラクラツと目が回り、なんだか気まで遠くなりそうです。

そして、山犬が、すごい勢いで、上向きに回ろうとした時、

急に、金太郎が、

「えーい！」

と、さげんで、投げるようにしてふじづるを、ポイツとはなすと、山犬は、ちょうど鳥でも飛

ぶように空中を大きく飛んで、向こうに見える丘をこえて、遠くみえなくなってしまうました。

こうして、山犬が、全部こらしめられてしまうと、どこからともなく、野じかの家ぞくが現われて、しかの習かんであるうれしい時の感じを表す トン、トン、トンと、前足で地面をたたきながら、みんな金太郎のそばへ、からだをすりよせて行きました。

それで、ジロツボも

「おかあさんー」

と、ズイドウのなかから出て見ると、そこは、広い畑で、畑のうしろには高い丘があつて、かやぶきの小さい家が建っていました。

そして、その家の前に、白がまじりのかみをたばねてうしろへ長くたらしめた金太郎の母が、山のなかでくらししている人とも思えないほど、きちんと着物をつつましく着て、やっと安心したと言ったほほえみをうかべ、金太郎や野じか達を見つめながら立っていました。

ツキノワのまき

五、赤い花の悪ま

山々の雪がとけると

春を知らせる足音のように、足がら山の谷川に雪どけの水が、ごうごう流れて―やがて、せせらぎの音ものどかに、さわやかな緑の風が吹き始めました。

そして、あたたかい光をあびて、まず、まっ先に、ゆきやなぎが芽を吹き、次につばきの花がほころんで、もくれんの花もいにおいをただよわせました。

川原のつつみに、つくしんぼうが頭を出すころには、若草も緑にもえて、ゆらゆらかげろうが立ちのぼっていました。

またそのころになると

金太郎が、母と一しよに苦勞してたがやした畑にも、黄色い毛せんをしきつめたように美しい菜の花が、丘一面にさきそろって―黄ちようやもん白ちようが、春のまいをまっつて、ひらひらと花から花へ飛び回り、そして、みつばちや花ばちも、花畑の仕事に一生けん命精を出して、せつ

せと働いていました。

それから、また、しばらくたつと、丘の南がわの、たちばなの木にいっぱい白い花が咲いて、その木の根が持ち上げている地面の、デコボコ道で大勢の山ありが、ぼつぼつ春の仕事を始めようと、みんなで助け合つて、畑の肥料にやった川魚のほね切れを

「えっさ、えっさー」

と、かつぎ上げて、自分達のすへ運んでいました。

また、その少し前ごろから、冬眠のゆめから覚めた山々の動物が、長い間の空腹をみたそうとえさをあさりますが、なかでもむささびは、山一番の食いしんぼうで、なんでもかんでもコリコリ、コリコリかじります。

そして、夜になると、林の向こうから

「カツカツカツカツカツカーラー」

と、ものすごいさけびを続けて、山みんなをおそれさせます。

こうしたことが、しばらく続いて

夏が、すぐ、目の前へやって来ると、川原やつつみの石あなから、一番ねぼ助のへびやかかけ

が、やっと長い冬のゆめから目を覚ましてはい出し、湯氣を立ててわき出している温泉の周囲へ、みんなぞろぞろはい寄って行きました。

また、くぬぎ林の中では、からからぬけ出したばかりの、かぶと虫やくわがたが、からだの三分の一もあるうと言う大きなつのやはさみで、くぬぎの木の皮をむき取って、皮と身の間から、チュウチュウうまそうに、くぬぎのしるをすすっていました。

やがて、夏が来て

つつみの石あなからはい出した石がめが、川原の水たまりで泳ごうと思いましたが、二年は、どうしたことか、川原に水たまりが少しもありません。

それは、とのさまがえるが、

「ゲロゲロ、クエクエー」

と、歌い出すつゆの初めごろから、まだ一てきの雨も降らなかったためです。

で、夏の初めがやって来ると、谷川の流れさえ、だんだんかれて、深い滝つぼの他には、岩間に少し水だまりが、ところどころ残っているだけでありました。そして、その残り少ない水たまりの中で、げんごろうやみずすましが心細そうに、川魚の子ども達を追っかけ回していました。

そして、また、谷川の流れも、日に日に細まって、とうとうかれ上ってしまいました。しかし、

深いふちを作っている滝つぼだけは、いく日晴天が続いても、まんまんと青い水をたたえて、すずしい山風にさぎ波を立てて、金太郎親子と、野じかの家族の命をつなぐにはじゆう分な水がさをたくわえていました。

こうして峠は、からつゆのままあちらこちらの松林で

「ギーギー、ー」

はるせみが、やかましく鳴き出しました。

それで、金太郎は　ここでさえ、飲み水が、滝つぼだけになってしまったから、野うさぎのすや、くまの岩屋のあるもつと川上ではどうなっていることだろうかと、子うさぎのヤトや、子ぐまのツキノワのことが心配でなりません。

と言って毎日、畑の水やり仕事がいそがしいので、川上まで行ってやることさえできません。

話は、変って

子うさぎのヤトは、去年の秋、くりの実を取入れてから半年目で、もうりっぱな野うさぎに成長していました。

そして、この日照り続きで、こちらがわの、日かげの少ない岸では、若草がおおかた、かれてしまったので、弟うさぎ達を連れて、ひ上った谷間を渡って、みんなで向う岸のひのき山のふもとで、毎日のようによもぎつみや、若草がりの仕事にはげんでいました。

だが、ツキノワは、まだ子ぐまです。去年の冬には、せ中で雪すべりすることも出来るようになっていましたが、小じかのジロツポと同じように、半年や一年では、おとなぐまにはなれません。

しかし、ツキノワも、冬ごもりがすんで春になって岩屋のあなをふさいでおいだ雪のかべをこわして出て来ると、しばらくはやせていましたが、むさぼるように食物を食べるごとに、ぐんぐん急にからだも大きくなって―谷川をさか上って来るやまめやいわなを、自分でつかみ取れるようになっていました。

また、太ったからだでも、谷間の岩から岩を飛び回るかじかさえ、す早く取りおさえることが出来ました。そして、また、日本の谷川だけに住んでいると言われるさんしょうおのはんざきと組打ちして、これをとらえたこともありました。

でも、雨が降らなくなつてからは、こと谷川の上流には、いつの間にか、やまめもいわなも、どこへ行つてしまったのか、すがたを見せなくなつてしまいました。そして、岩の間のさわがにも、水気のない岩あなのおくで

「ブツブツ」

毎日、不平のあわを吹き立てて、日当たりの強いあなの外へは、いつこうに出て来そうもありません。また、谷川第一の働き手と言われているかわうそも、川水が少なくなつてからは、川仕

事が出来ないので、川下の滝つぼまで下って、かせぎ場を変えてしまいました。

で、ツキノワも川仕事をやめて、峠の北がわの谷へ山仕事に出かけました。そして、山たにしを拾い集めようと、深い落葉をかきのけると、いくら日照りが続いていても、この北向きの谷は、しめり気が多いので、おもしろいほど、ころころと山たにしが出て来ました。で、ツキノワは、喜んで

「あつたあつたーこれだけあればきょう一日は、おなか一ぱいごち走になれるー」

と、む中になつて落葉をかきのけては、ころころ山たにしをころがして、さて、仕事すすんで……

「さあ、ごち走になるかー」

小声でつぶやきながらツキノワが、うしろをふり返つて見ると、せつ角あせを流してころがせた山たにしを、いつの間に来たのか、のすりが一羽、ツキノワには無だんがかたつぱしから山たにしを失けいしているの

「この、ふとゞきのすりめ！」

と、飛びかかつて行くと、のすりは、きつと飛びのいて

「すみません、すみません、ごち走になつてしまいましたよー」

そうわびて、あまり悪そうに赤みがかった茶色のつばさを、バタバタさせて飛んで行きました。

すると、ツキノワは、急になんだか空腹を覚えて、のすりに食われた山たにしのことが残念で残念でなりません。それで、元気がなくなり、もう帰えろうと、谷間のしだの葉をおし分けて、がけをよじ登ろうとすると、がけくずれの、日当たりのいい地面の上に、大ありの通っている道すじを見つけました。

「しめ、しめ、これで助かったー」

山たにしよりも大好きな大ありを発見したツキノワは、たらたらよだれを流しながら、ここが、ありの道の終点だとねらいをつけて、その地面の上を、ガサゴソ前足でほり返すと深い地面の下から大きなありが、四、五ひきあわてて飛び出しました。

そこで、その上を、ぐっと力を入れてふみつけると、今度は、大勢の大ありが足の下からぞろぞろはい出し、ツキノワの前足からみんなゴソゴソからだへよじ登って来ました。

くまは、大ありをなめることが大好きです。それは、ありが、くまの健康に欠かすことの出来ない塩の代りになるからです。

それで、ツキノワも、自分のからだの毛の中へ口先をつっこんで、ペロペロうまそうに大ありをなめました。

が、それでも、大ありが、毛のおく深くまでもぐりこんで、ガサガサ、ゴソゴソ歩き回るの、からだ中が、かゆくてたまりません。

こまりぬいたツキノワは、腹の方なら、前足でもかけますが、せ中の方は、後足をきように後へ回してかいたぐらいでは、とつてもかゆみがとまりません。

で、太い松の木の前に、後足だけで人間のよう立って、ひぢを曲げたりのばしたり、ガサガサした松のみきにせ中をこすりつけて

「おつちに、」

しばらく体操を続けていましたが、それでも、ますますかゆくなるので、母ぐまに大ありをなめてもらおうと思つてころげるように急いで岩屋へ帰ると

くまの岩屋では、大きわぎが始まつていました。

と、言うのは、去年の暮れから、とうみんのすきなやまねの兄弟が、寒い冬をこすために岩屋のすみで冬ごもりをさせてもらつていましたが、やまねの兄弟をねらつて飛びこんで来た山いたちのために、最前から追つかけ回されて、兄弟は、せ中に黒い太いたてじまのある小さいからだをひるがえして、岩屋の中の、岩かどから岩かどを、青くなつて逃げ回つていたのです。

そうになると、お客のやまねを助けるにも、父ぐまや母ぐまの重いからだでは、これも、岩かどづたいに追っかける山いたちを、取りおさえることが出来ません。

で、父ぐまは、ブンブンおこりながら下の方から、大きな声を張り上げて、

「こりゃー！この岩屋のお客を、どうしようと言うのさー」
と、どなりつけました。

すると、その声が、岩屋中で鳴り返って、グワングワンやかましくひびきます。

母ぐまも、ハラハラして、

「私達の岩屋で、そんならんぼうしてはなりませんー」

母ぐまらしく、やさしく言ったつもりでも、声に力がこもっていたので、また、岩屋中いっばいに広がってグワングワン大きくひびきます。

ちょうど、その時、ツキノワが帰ってきました。そして、このあり様を見ると

「山いたち！止めないかー止めないか、僕があい手になるぞー」

そう言ったと思ったら、そこは、子ぐまの身軽さで、一番高い岩かどの上へよじ登って行きました。そして、その下を追い回る山いたちの上から、体当たりする覚ごを決めました。

それは、どうしても、やまねの兄弟を助けてやらねば、くまの岩屋の名よにかかかわると思つたからです。

で、山いたちが、ツキノワのま下を通ろうとした時、

「今だっー」

とばかり、ドスンとからだぐるみ飛び下りて、前足で山いたちの、金茶色をした長いしっぽをぐつと取りおさえました。

が、山いたちは、す早くしっぽを細めると、ツキノワの前足からするりつとぬけて、かなわな
いと思つたのか、

「ここまで、おいでー」

そう言い残すと、サツと、岩屋の外へ飛び出して、短い足でも回転が早いので、すごい速力で逃げて行きました。

「しまったー」

と、思ったツキノワは、

「待て！逃がさないぞー」

こらしめのために、後から追っかけて行くと、山いたちは、あわてふためいて、すぐ川ばたの、

がけの石あなへ、自分の身長の上十倍以上もはなれたこちらから、サツサツサツと、三段飛びで飛びこんでしまいました。

そして、すぐ、あなの中から、こちらをのぞいて

「あま酒進上ー」

と、ツキノワをばかにしたように、からかいました。

が、子ぐまでも、ツキノワのからだは、小さい石あなへ飛びこむことが出来ません。

それで、前足を石あなへさしこんで、とらえてやろうと思いましたが、かえって山いたちに足をかまれる危けんがあると思つて、あなの前から

「ううー」

と、一声うなると、山いたちが後ずさりしたので、そーっと近づいて、あなの中をのぞいて見て

「おやつ、へびのすだ。うようよしまへびがいるよー」

と、山いたちにも、知らせるやうにつぶやきました。

で、初めて気づいたやうに山いたちが、おくの方へふり向くと

このあなに住んでいるしまへびの一族が、七、八びきも集まって、長いからだでとぐろを巻い

たまま、山いたちを、ただ、ひとのみにのんでやろうと、ぎらぎら目を光らせて、こちらをにらみつけていました。

それで、山いたちは、もうツキノワをからかつてはいられません。そして、へびなんぞにのまれてたまるものかと、自分の方から先に、しまへび達のとぐろをかき散らしてやろうと思つて、首を低くして白いきばをむき出し、しりを高く上げてしっぽをふくらし、ポンポン左右へはねて、へびに飛びつかれないように用心しながら、するどい足のつめをとがらせて、とく意のこうげき法で、じりじりせまって行きました。

だが、しまへび達は、落ちついて、するするつととぐろをとくと、みんな一しよに、ぬうーとかま首をもたげ、まつ赤な口を、さけんばかりに大きく開いて

「だれだ！ 昼ねのじゃまするのは、頭から、そっくりのんでしまうぞー」

そう言つて、ペロペロしたなめずりするおそろしさに、山いたちは、こりや、自分のはや、つめではかなわぬと思つて、急に逃げごしになつてしまいました。が、せまいあなの中では、はずみをつける広さもないし、そのうえ、外にはツキノワが、がん張っているのです、飛び出すことが出来ません。

そのうち、しまへびの家族達が、うす青く茶色に光つたうろこの、長いからだをニョロニョロ

うねらせて、だんだん近づき、気持の悪いしつぽが、ちようど目でもあるように、あちらからもこちらからも巻きつこうと、山いたちをねらっています。

で、本気に逃げごしになってしまった山いたちは、そうになると、たゞもう、おそろしくおそろしく、カチカチはを鳴らしながら、あなの外のジロツポへ

「助けて下さいーもう、けっして、やまねを追い回すようなことはしませんから、どうぞ助けて下さいー」

と、そう言つて、手を合わさんばかりにして頼みました。

こうなると、ツキノワは―いたずら者の山いたちでも、同じけものなか間です。間ちがいの起こらないうちに、早く助けてやろうと思つて

「じゃア、二度と、岩屋のお客に失礼する様なことはしないな―」

と、念をおしてから、石がきを

「うん、うん―」

かけ声に合わして、カ一ぱいおしてみました。が、どうしたことが、向こうへは、少しも動こうとしません。

それで、今度は、右前足をあなの中に回して、左前足で石かどをかかえ、後の両足で石がきを、ぐつとふんばって

「うーん！」

と、力を入れてこちらへ引くと、がけ石が、ゴクゴクと動き出したと思ったら、ふいに、こちらへ、すーっとぬけました。

が、そのひょうしに

「うあー」

ツキノワは、大きな石をかかえたまま、ころころうしろへでんぐり返ってくまざさの上をすべって、ずうつと下の土あなへ、ころげ落ちてしまいました。

そして、ツキノワが

「おやつ、ささぐまのすだー」

と、気づいて、よく見回すと、そこは、ささぐまが足のつめで、地面を横ななめに深くほって、自分達で作り上げた土あなです。が、もぐらの土あなのように、年がら年中、日の目を見ないような不衛生なすではありませんでした。そして、そのうえ、青々としたささの葉までしきつめて、住み心地のよきそなすでありました。

で、ツキノワは、すのおくの方へ

「今日は、だれかいませんか」

と呼んでみましたが、

「ー」

なんの返事もないのは、ささぐまの夫婦も日照り続きで、かわうそのように川を下って、どこへ仕事に行っているのでしょうか

でも、この春生まれたと聞いているささぐまの子はいないかと、横あなのおくまではいって行くと、三びきの子どもがのん気そうに、すやすや昼ねをしていました。

それで、目を覚まさせてはならないと思って、そのまま、そっと帰ろうと、あなの出口の上の、ささのくきに、ツキノワが前足をかけると

ささの葉の下から三角頭のみむしが、黒味が、かた茶色のうるこに、せにがたのはんてんのある長いからだを、うねうね無気味にうねらせて

「上って来て見ろー」

と、毒をふくんだきばを、ぐつとむき出して、今にも飛びつこうと待ちかまえていました。

「こりゃ、こまったー大きなまむしがいるー」

すると、その時、遠くの方から一羽のきじが、美しいつばさを、すうーっとすぼめて、ななめ横にまい下つて来て、ささむらの向こうへ降りたかと思うと、いつの間にか、ささの葉の下をぐり抜けて、まむしのうしろへそつと近づいて、ふいにまむしの首すじを、

「この、毒虫め」

とばかり、するどいつめ先で、ぐつと、ねじりつけるようにしてふみつけました。

まむしも、首すじをおさえつけられては、かま首をふり回すことが出来ないのです、自まんの毒ばが、なんの役にも立ちません。

それで、まむしは、ぎらつく目で、下からきじをにらみつけて

「首を、おさえつけられても、金しばりの術があるぞー」

と、長いからだを細いしっぽの方から、ぎやくにからみついて、きじを羽根ごと、ぐるぐる巻きに巻きあげました。

だが、きじは、じいっと自分のからだへ、まむしの思うままに巻きつかせておいて

「もう、それでいいのかー」

そう念をおしたかと思うと、急にパツ！と一羽ばたき、緑に光るつばさを、カ一ぱい大きく広げました。

すると、もうそこには、まむしのかげもすがたも見当たりません。まむしの長いからだは、ずたずたに切りさかれて、ちりぢりばらばらに飛び散ってしまいました。

と、思うと、また、きじも油だんがなりません。最前から、向こう岸の松の木の上に、きじの、二倍ほど大きい大たかがねずみ色のつばさをたたんで、じいっと静かに、今に飛ぶか今に飛ぶかと、きじの飛び立つのをねらっていました。

で、それを感じたきじは、

「おやつ大たかが、ねらっているぞー」

と、すぐ、首を地面にすりつけるようにして、自分の羽根色を同じ緑の草むらにかくれながら、しばらくは、飛ばたきの音も立てないようにつめ先で走って、今度は、大たかの大きいつばさでは、どうてい飛ぶことの出来ないくぬぎ林の、木と木の間をぬうように低く飛んで逃げ出しました。

けれど、大たかも、するどい目と勘を持っているので、すぐ、きじの逃げ道を

「くぬぎ林の南へ逃げたなっー」

そう、感じると、その手で逃げるならこの手で行くぞと、くぬぎ林の上をまっすぐに飛んで、きじの逃げ口へ先回りしました。

そして、林の下をぬけて来たきじの出っ鼻へ、パツ！と、上から飛びかかって行ったので逃げ場を失ったきじは、

「しまったー」

ちよつと、だじろぎましたが、機びんにつばさをかわすと、すぐ一直線に大空へ、高くまい上がっていききました。

すると、ちようどその時、

かりにかけては鳥一番のはやぶさが、はい色に赤味がかつたつばさをはやめて、空の横合いからはやてのように飛んで来て、きじと大たかの間へ、サツとわりこんで、大たかのつばさを、きしゅうの一げきで、

「えい！」

と、はげしくけつたので、大たかは、

「ふい打ちは、ひきようだぞ！」

そうさけぶと同時に、バサツバサツと、白い下ばらまで見せて、もんどり打ってよろめきました。

で、きじは、このはやぶさと大たかの一つき打ちの、そのすきに救われて、つばさをすぼめて

ななめ下へ一直線に、すーうつと、林の中へ降りてしまうと、羽尾音をしのばせていつの間にか、かけるようにして、滝つぼの岩かげまで逃げてしまいました。

五十日余り晴天が続いても、滝つぼの周囲だけは樂園で、峠に住む動物達にとっては、ここは命をつなぐ、たゞ一つの泉（オアシス）でありました。

いまだに、青々と水をたたえているこの滝つぼの水面では、おおみずすましやげんごろう、そして、みずぐものような小さい虫に至るまで、毎日水上ゲームを楽しむことが出来ました。またその水ぎわには、あおさぎやこさぎなどのなか間が、ここばかりに集まった川魚をとらえて、その日その日を気楽に送っていました。

そして、その付近の森や林の中から、つつどり、ひよどり、おおるりなど、小鳥の中でも歌の名手の、美しい声で合唱する山のコラスが、毎日すずしい風に乗って流れて来ました。

それから、また、この滝つぼを取り巻くようにして、いろいろなけものなかが、あちらこちらでそれぞれ、楽しい自分達のすを作っていました。その中で大きいけものと言えば、ジロツポ達野じかの家族と、裏山の古すに暮らしているきつね夫婦と、くぬぎ林に横あなをほって住んでいるたぬきの一族だけではありません。

そこで、きつねとたぬきは、よく人間をばかすと言われていますが、この山では

「金太郎さんは、山でもきらわれ者の私達まで、みんな同じようにかわいがって下さるからいくら、ばかそうと思っても、親切な人には、ばかしの術がかかりませんよ」

と、きつねが言いますと、たぬきも、また

「そうですとも、そうですとも、私らも、いつも人間から、白い目で見られるきらわれ者のなか間ですが、金太郎さんだけには、大変かわいがられています　そのためでもありませんが、

これでも、小鳥の卵をねらうへびや、畑を荒らす野ねずみを退治して、少しは世の中のために尽くしているつもりですが　」

と、相づちを打ちました。

そうです。きつねとたぬきの言うとおりです　人間からいたずらを仕かけないかぎり、きつねやたぬきの方から、悪だくみを仕かけてくるようなことはありません。

さて、話は、また変わって、そのころ、子じかのジロツポは、毎日のように滝つぼの横から、用水路のズイドウを通って、金太郎の家へ遊びに行きました。そしてジロツポは、いつも金太郎に

「僕、ヤトやツキノワの所へ遊びに行きたいなァ

」

と、ねだるのです。

だが、長い日照り続きで、畑の作物がかれそうになっているので、金太郎は、

「きょうも、畑へ、水あげをしなきゃならないから――」

と、子じか相手の、山遊びどころではありません。用水路に水車を作って、ガッタンコットン。ガッタンコットン、朝早くから夜おそくまで、畑の水上げ仕事にはげんでいました。

でも、この山にも、長い日照り続きも知らぬ顔で、毎日毎日のん気に昼寝ばかりしている者がありました。それば、滝つぼのすみっこの、どろの中に住んでいるどろがめの家族達でありました。

きょうも天気がよいので、親がめは、がけの上にはい上がって、カンカン照る日に甲らをほしていました。

が、とつ然、バシヤンと水の飛ばしりが、半出しのねぼけ顔へかかったので、そつと首をのびし、じゃまくさそうにかた目を開いて見ると、サ、、、、サツと、滝つぼの水面を走るように、さざ波が立って、パツと一勢に水鳥達が、バタバタ飛び立って行きました。

親がめは、また、ねむそうに首を甲らの中へ仕舞いながら

「さゞ波ぐらいに、バタバタさわいでー水鳥達は、あわたゞしくてこまったことだー」

そう、つぶやいているすぐその後から、今度は、サーつと、森や林を大きく鳴らして、小じやりまじりのはげしいあらしが、バラバラどろがめの甲らをたたきつけました。

それで、最前から、岩かげでつばさを休めていたきじも、羽根をあふられて思わず、大空をながめました。

すると、いつもとちがったいやな色の大空を、大きな鳥がつばさを広げて飛んで行くように、真つ黒な流れ雲がいそがしく、北へ北へ飛んでいました。

で、きじは何か、おそろしいことが、今にも起こるような予感がして

「こんな日には、早く、すへ帰るにかぎる

—

と、岩かげから、パツと飛び立ったものの、大たかや、はやぶさのしゅうげきにそなえて谷川の流れにそって低く飛んで行きました。

が、ビュービュー吹く山あいの、風にさからっては、速力が思うように出せません

思い切って大空へ、高く舞い上がって行くと、右の方に見える相模（さがみ）の海が、海神でも荒れくるっているようなひどいあらしで、山のような白波が高く波立って、ゴーゴー大空までも、

海鳴りが聞こえて来るように感じられました。そして、すぐ目の下の山や谷を見ると、森も林も草むらも、はげしいあらしにあふられて、ちようど緑の波が、大きく波打っているように見えませんでした。

そして、その時、ひのき山から

「あつ煙だ！赤い花の悪まだ！」

ときじは、おそろしそうにさげびました。

それは、長い間の晴天で、かわき切ったひのきの枝と枝とが、風のためにはげしくすれ合って、自然に火を吹き出したためでしょう。

きじは、たびたび起る山火事のおそろしいことをよく知っていました。山の何物をも残さないで焼きつくしてしまう山火事は、山の動物達にとつても、一番おそろしい悪まです。そして、ふと、去年、ひな鳥をいだいたまま、すの中で焼け死んだ山鳥の母親のことを思い出して、急に、森のすに残した家族のことが、心配で心配で、はげしいあらしの中で、ぐんぐんつばさを速めました。

ちようど、そのころ

子うさぎ、いや今は、もうりっぱなおとなの野うさぎになっていたヤトが、弟うさぎ達を連れて、ひのき山のふもとで夏草をつんでいましたが、パチパチ自分達の方へ、もえ広がって来る山火事に気づいて、ロクに

「赤い花の悪まだ！」

「逃げろ、逃げろ！」

「となり山へ逃げろ！」

弟うさぎ達は、うさぎの習性で、すぐ、山へ山へ、となり山へ逃げようとなりました。

が、ヤトは、火の手は、いつも上へ上へと、もえ広がることを知っていたので、やがてとなり山へも火事が移るだろうと、ピョンピョン弟うさぎ達よりも、先に山へかけ登って

「山へ登っては危ない！道を横にとって、下へ下へ逃げるんだ」

と、大声にそうさけびながら、弟うさぎ達の登って来るのを、みんな下へ降ろしてやろうと、けん命になってさえぎりしました。

だが、火の手が、下の方から追っかけるようにもえ上がって来るので、弟うさぎ達は、何をじやまするのだと言ったように

「でも、赤い花の悪まが、下から追っかけて来る」

と、ほのおをおそれて、どうしても、山から降りようとはしません。

で、可愛いそうだと思いますが、ヤトは、

「聞き入れ無い者は、けり飛ばして、赤い花の悪まに食わしてしまうぞ！」

と、どなって、こわい顔してけり落とすぞと言ったように見がまえました。

これには、弟うさぎ達も、仕方なさそうに、しぶしぶ一羽、二羽と、みんな火の粉の下を、まろびつころげつして、山の中ほどから、下へ下へ逃げて行きました。

が、まだ、うさぎの習性で、上へ上へ　山へ逃げようとする弟うさぎもいるので、ヤトは、頭の上から火の粉をあびながらも、長い間、となり山にがん張って見張っていました。

六、山つなみ

ツキノワは、きじが、まむしをたい治してくれたことを知らずにいました。

で、あなの出口に、まむしが見張っていると思って、しばらくはささぐまの土あなから、帰れそうもないとあきらめたものか、ささぐまの子ども達と昼ねをして帰ろうと、のん気な考えを起こしました。

そして、ささぐまの子ども達のそばへ横になると、すぐねついて、深い土あなのおくでは、時間も分からず、あらしも地面の上を通ってしまうので、何んにも知らず長い間、グウグウぐつすり、い、気持でねむっていました。

すると、そのツキノワのね顔へ、どうしたはずみか、火事場から火の粉が飛んで来たので

： 「熱っ、熱つつつー」

と、びっくりして目を覚まし、飛び起きてあなの外をのぞいて見ると、もうもう立ちのぼる黒煙と一しよに、まっ赤な火の粉が、一ぱい飛んで来るので、

「あっ赤い花の悪まだ！」

と、思い出したようにあわてて、あなの中からはい出ると、ピューピューはげしいあらしで、谷向こうのひのき山が、明々ともえ上がっていました。

そして空には、いつの間にか夕暮れの雲が流れて、そのうえ、まっ黒な雨雲が、頭の上からおいかかるように低く飛んでいるので、一つそう火の手が、大きく明るく映って見えました。

「大きな、赤い花の悪まだなー」

と、ハラハラしながら、横吹きのあらしの中を夢中になって、大くりの木の下まで、フーフー息をつぎながら走って行くと、野うさぎの両親やりすの家族も、みんなすの中から飛び出して、わいわいさわいでした。

そして、野うさぎの両親は、子うさぎ達のすがたが見えないので、ことに母うさぎは、早や泣き顔になって

「ーたしかに、子うさぎ達は、朝早くから、ひのき山のふもとへ、みんなで草かりに出かけたんですーまだ帰らないところをみると、赤い花の悪まに食われてしまったにちがいありませんー」と、悲しそうになみだを流しています。

で、父うさぎは、これを打ち消すように、

「でも、そう、くよくよ思っても仕方がないよーあらしの中の、こんな大きな赤い花の悪までは、見に行つてやることも、救いに行つてやることも出来ないじゃないか、それに、みんなは、なんとかうまく、無事に逃げていると思ふんだがー」

母うさぎを元氣付けるためにそう言いましたが、本当は、父うさぎも心の中では、心配で心配でなりません。

すると、また、母うさぎが、

「無事に逃げたものなら、とつくにこちらの岸へ、帰つて来ているはずじゃありませんかー」と、なじるように言いました。

だが、この言葉を聞いて父うさぎは、ようよう子うさぎ達の、帰つて来ないわけが分かつたように

「ハ、ハ、こちらへ逃げれば風下だから、赤い花の悪まに、みんな食われてしまふじゃないかーそうだ。きつと、子うさぎ達は、風上の向こうの方へ、うまく逃げているにちがいない。そして、赤い花の悪まが、消えてしまつてから、ゆつくり帰つて来るつもりなのだろうー」

そう言われて、始めて母うさぎも、そして、言った父うさぎまでもが、少し心が落ち付いて来ました。

と、思っていると、そのそばから、親子すの一びきが、口をはさんで

「子うさぎさんのことも心配でしょうが、今となってはそれよりも、われわれの方が、早くこ、から、引越しておかないと　なんとと言っても、命あつての物種ですからなア　」

そうしゃべりながらも、おく病者の親子すは、山火事がおそろしくしておそろしく、大きなしつぽを小さく細めて、カチカチはを鳴らしながらふるえていました。

が、父うさぎは、こんどは、思いの外元氣そうに

「いや、そんな心配はいりませんよーどんなに大きな赤い花の悪までも、この谷川だけは渡れないと思いますから、もつと落ち付くことが大切ですよーそれに、なるべくここにおつてやらないと、子うさぎ達が、帰つて来た時に心配しますからなアー」

最前から、こうした話しを聞いていたツキノワは、これで自分も安心しました。それで、子どものおそろしい物見たさに、もつとはつきり火の手をみよう、と、大くりの木の中ほどまで、元氣によじ登つていきました。

が、ちょうど、その時です。
まっ黒な雨雲の中から、ピカリツ！と、いなづまがきらめくと、ザァーと、大つぶの雨が、た

たきつけるように降って来て、すぐ、耳をつんざくような、はげしいかみなりがとどろきました。

で、かみなりぎらいのツキノワは、思わず目をつぶって

「くわ原、くわ原」

と、耳をおさえながら、そうつぶやいた言葉も、その半分は泣声です。そして、その泣きづらの上で、また気ちがいのように、ピカッピカッと光り、ゴロゴロ鳴って、かみなりは、滝のような雨と一しよに、まっ黒な雲に乗って、だんだんこちらへ近づいて来ました。

たまらなくなったツキノワが、大くりの木から降りようと、かた足はずした時でありました。目もくらむような、するどい光のいなづまに打たれて、

「助けてー！」

と、さけぶと同時に、

地面をた、きつけて、耳のこまくも破れてしまったかと思うような、物すごいかみなりが鳴って、気の遠くなったツキノワは、大くりの木からすべり落ちると、もう何もかも分からなくなっていました。

それから、いく時間かが過ぎて

朝になっても降りやまぬ大雨と大あらしの、はげしいひびきにツキノワは、ようやく正気を取

りもどしました。そして、キヨロキヨロあたりを見回して

「あつ僕らの岩屋だー」

と思ひながら、岩屋の外をながめると、今までに、まだ見たことのないような大雨で、あらしは、立木も吹き飛ばすような勢いで吹きなぐっていました。そして、雨水が急流のように、ゴーびびきを立てて、今少しで岩屋の中まで、流れこみそうな水かさになっていました。

それで、ツキノワは、心配になって来て、そばにいた母くまへ、

「おかあさんー」

と、言つてだきつくと、母ぐまも、ツキノワをだきかえして

「よかつたね、よかつたねーもう少しでお前は、かみなり様に、打たれてしまうところだったんだよー」

と、教えてやると、ツキノワは、聞きただすように

「かみなり様、くりの木へ落ちたのー」

そう言つて、目を丸くしましたが、母ぐまはすぐ、それを打ち消して

「いえいえ、くりの木は助かりましたが、そのとなりの三本杉にかみなり様が落ちたので、一番高い杉の木が、まっ二つにひきさかれて、まっ黒く焼けこげてしまいましたよー」

「えっ、あの一番高い杉の木にー」

ツキノワは、もしも、杉の木に登っていたら、かみなり様に打たれて死んでしまっただらうと思うと、ぞっと寒気がして、短い首を、一そう短くちじめました。

そして、また、そ　　つと首をのばして、今度は、岩屋の出入口の方へ目をやると、そこには、この山で一番年かさだと言われる父ぐまが、いつもとちがつてむっつりとした顔付きで、大空一面にまだ、まっ黒くおおいがかかって、なかなか去りそうもない雨雲をながめていましたが、ツキノワの目を感じると、ひとりごとのように

「ひよつとすると、山つなみになるかも知れんよーそんな時には、丸木橋を渡って、峠（とうげ）の一番上へ逃げるんだなァー」
そう教えるように言ってから、また、心の中で、逃げる時の計画を立てていました。

それは、けもののかんで、いくら日照り続きの後でも、こんな大雨が三日も降ると、山つなみがやって来て、森も林もみんな、だく流にのまれてしまうことを、父ぐまは、もうなんべんも経験しているのです、いやになるほどよく知っていたのです。

風は、少しやみましたが、足がら山に降り続く大雨は、きょうでちようど、三日目の朝をむか

えました。

そして、だく流におし流されて、つつみの一部がくずれると、そこからあふれ出した大水は、初めは、白波を打って流れていましたが、だんだん広い地面一ぱいに広がって、野じかのすも、いつの間にか、油のにじみこむようにこう水につかっしまいました。

で、父じかは大声に

「さあみんな、私について来るんだーだが、あわてると、足を水に取られるから、用心して歩くんだよー」

と注意して、家族を連れて雑木林まで出て来ると、あらしのために立木が、あちらこちらにたおれていました。そして、そこも、深い落葉がういてしまっていたので、たおれた立木を飛びこえながら、落葉の上を浅せを渡るようにして通りぬけ、少し川上で、水のあふれ出していない高いつつみの上へ登っていきました。

が、川原は、見わたすかぎり一面に水があふれて、川の流れが深いので、どこから歩いて渡ることができません。

「これじゃ仕方がない。みんな泳ぐことにしよう。流れが早いから、ななめ横に川下の向う岸へ、流れに流されながら泳いで、金太郎さんの家のある丘へ逃げるんだ」

そう、父じかが教えると、母じかも賛成して

「それが一番安全ですー私は、子ども達の後から泳いで行きますから、おとうさんは、先に泳いで下さいー」

話が決まって、父じかが、最初にだく流へ飛びこむと、続いて子じか達も、ジャボンジャボンと飛びこみました。そして、最後に母じかが流れにはいつて、みんなで用心しながら流れに乗って泳ぎ出しました。

が、子じか達は、こんな強い流れを泳ぐことは、生れて初めてですから、みんなヒヤヒヤしながら泳いで行きました。

その様子を見て母じかは、後の方から

「水を飲まないよう頭をあげて、元気に泳ぐんですよ。流れに負けてはいけません。四本の足を休ませず、交代に働かせて流れをかくんですーしかのなか間は昔から、泳ぎにかけては、どんなけものにも負けたことはありませんーだから、お前達もしっかり泳ぐんですよー」

と、大きな声で、声えんしました。

そうです。母じかの言う通りです。しかは泳ぎが、他のけものよりも達者で、遠い海を島から

島へ、楽々と泳ぎ回る大じかさえあります。それで、ジロツポも初めの間は、少し水を飲みましたが、母じかの声えんで父じかの後に続いて、どの子じかよりも早く、向う岸へ渡り切る事が出来ました。

それで、ジロツポは、うれしくてうれしくて、父じかよりも先に立って、飛ぶように丘を登って金太郎の家へかけて行きました。

が、金太郎のすがたは、家のどこにも見当りません。で、がっかりしていると、野じかの家族もみんなやって来ました。

すると、その足音を聞き付けた金太郎の母が、家の中から出て来て

「みんなも、達者でよかったね、金太郎は今、滝の上手で仕事をしていますが、お前達は、山つなみの終るまで、ここにいる方が安全ですよー」

と、やさしくいたわりながら、野じか達を裏の小屋へ連れて行きました。

そして、かわいい布を出して来て

「まあ、こんなにぬれて、これでは、けものでも病気にかかりますよー」

そう言つて、野じか達のぬれたからだを、すっかりきれいにふいてやったので、父じかも母じかも、うれしそうに金太郎の母へ、からだをすり付けて来て、前足でトントン地面をたたいて

……

「ありがとうございますー」

と、感謝の喜びを表わしました。

で、子じか達も両親を見習って、しかの習性であるトントンと、みんな前足で地面をたたいて喜んでいと

「この大雨では、みんなも食べ物がさがせないから、おなががすいたことでしょうー」

金太郎の母は、そう言いながら、よくじゆくしたいちじくの実を、大きなかご一ぱい重そうに出してくれました。

「ごち走だなァー」

と、子じか達は、三日間の長雨で食べ物らしい食べ物は、少しも食べていませんから、すぐ、飛びつくように、かごの周囲へ集まって来ました。

すると、母じかが横から

「おぎようぎよく、みんなでいただくんですよー」

と、子じか達をたしなめました。

それで、ジロツポもみんなと一しよにぎようぎよくいちじくをごち走になりました。

そしてしばらく、うす暗い小屋のすみずみまでよく見回していましたが、とつ然

「ヤトだっ、ヤトがいるー」

そうさげびながらもジロツポは急にうれしくなりました。

それは、心配していたヤトが、この小屋のすみの方で、しき草の上にねていたからです。山火事で弟うさぎを救ったヤトは、やけどの手当てをしてもらって、そこにねていたのです。そして、弟うさぎ達も、みんな無事らしくそばにいて、初めて見る野じかの大きいからだ、ことに父じかの大づのを見て、かわいい赤い目をパチクリさせていました。

そのころー金太郎は、滝の、すぐ上手の岩の上に立って、あらしにたおれて流れて来る立木をのけようと、大雨に打たれながら流木よけの仕事に励んでいました。

もしも、滝の上手の岩々にじゃまされて流木の山ができると、川の流れがせき止められて大水が横へ切れてあふれ出し、自分達の畑も家も、こう水のためにおし流されてしまいます。

で、金太郎は、じょうぶなふじづるでなつたつなを使って、とく意のかけなわで流木を引き寄せる仕事に、一生けん命働いていたのです。

だが、仕事中でも友達のことかーヤト達は、助けてやって小屋にいるし、ジロツポの家族も少

し前に、流れをこちらの岸へ逃げて来て、丘へ登って行ったのを見たから心配ないが、ツキノワは、どうしているだろうか、仕事に励みながらも、心の中では、そのことばかり気にかかってなりません。

ところでその川上では

第一にささぐまの土あなが、次にしまへびの石あなが、そして、きのうのま夜中ごろからは、野うさぎの石だたみまで、すっかり大水につかってしまつて　みんなは、びしょぬれになつたまま峠（とうげ）の上へ上へと逃げて行きました。

また、小鳥達のすも大雨に打たれて、枝からたたき落されて流れて行くものが、数え切れぬほどありました。

で、くりの木の、枝と枝との間に作られたりすのすも、二日目から雨もりで、ピチャピチャぬれて弱っていましたが、その木の太いみきに大きなうつろがあつたので

「さあ、こんな時には、ここへひなんするにかぎりますよ　」

と、りすの家族は、みんなそこで、この長雨をさけることにしました。

ところで、くまの岩屋では、きのうの夕方から山つなみをけいかいしていた父ぐまが、一晩中

ねむらないで、ねむたい目を無理に見張って、あちらへのそりのそり、こちらへのそりのそり、岩屋の門前をなん度も行き来して、水の番をしていましたが、母ぐまは、ツキノワがおととい、くりの木から落ちてからまだねていたので、岩屋の中で外へも出ずに、ツキノワのかん病のために付き切っていました。

それで、ツキノワは、大雨のひびきを子守り歌のように聞きながらスヤスヤねむってしまった——谷川でやまめを取っているゆめを見ました。そして、きれいな流れをスイツスイ泳ぎ回るやまめを、今にも、たたき取ろうとした時でありました。あやまって岩の上から流れの中へ、ジャボンと落ちて、

「冷たいっ——」

と、さげんだ自分の声で、思わずゆめが覚めました。

が、それは、ねどこの上から、岩屋の中まで流れこんだだく流へ、ころがり落ちていたのです。で、あわてて、すぐ、だく流からはい上ると、その時、ふいに、

「さあ！みんな、向う岸へ逃げるんだっ——」

と、命令するような、父ぐまの、ど鳴る声が聞こえました。

おどろいたツキノワと母ぐまは、あわてて父ぐまの後から、その行手の、あちらこちらにたお

された立木を、もどかしそうに飛びこえたり、くぐったりして、丸木橋のたもとまでついて行くと、こちらがわの岸にかかっていた杉の木の先が、もう半分大水にういてしまつて、岸からはなれそうになっていました。また、向う岸の根もどの方も、わじかにみきが、根もとにつながつて
いるだけでありました。

「この丸木橋を渡るんですかー」

母ぐまが、不安そうにたずねると、父ぐまは、急がしそうな口ぶりで、

「そっだよ、丸木橋を渡つて、ひのき山へ逃げるんだー」

と、はつきり言い切るので、

「でも、こんなになつてゐるのに、渡られるんですかー」

まだ、母ぐまは心配そうです。すると、父ぐまが、元気づけるように

「なあに、これでも、渡れんことはないだろう。いつまでも、こちらの岸にいと、すぐ今に、山つなみがおし寄せて来て、みんな流されてしまふー」

父ぐまは、そう答えると同時に、ジャボンと水音を立てて、うきかけた丸木橋に飛び乗りまし
た。

それで、続いてツキノワが、そして、最後に母ぐまが、おそろおそろ飛び移ると、その重さで、

ポキッ!と、杉の木の、根もとのつなぎ目が切れてしまつて、切れ目のはしが、向う岸のがけを、ガリガリガリつとけずるようにして、ザブン!と、大きな水音を立てました。

これで、もう、杉の木は、丸木橋ではありません。一本の流木、いや、いかだ舟になつてしまいました。

すると、ちょうど、その時、

川上から、せきを切つてあふれ出したこう水が、立木も岩もなにもかも、ゴーゴーおし流しながら、どつと一度に流れて来ました。

「うわあー!」

「山つなみだぞー!」

親子のくまが、あわてふためいているうちに、だく流におし流されたいかだ舟は、ものすごい速力で、川下へ川下へ走り出しました。

で、三びきのくまは、あまりのおそろしさに、ただ、もう、む中で、杉の木のみきと枝とに、一生けん命しがみついていますでしたが、それでも、母ぐまは、自分のことよりも、かわいいツキノワが心配で

「しっかりするんですよー足のつめをはずすと、波にさらわれてしまいますからー」

と、大声を張り上げて、そう注意しましたが、ゴーゴー流れのひびきが高いので、はっきり聞き取ることが出来ません。

が、ツキノワは、とっさの感でそれが分かると、

「う、ん、僕、大じょうぶだ！ー山つなみなんぞ、少しもおそろしくないよー」
と、元気にそう答えました。

それは、ツキノワのからだ小さいため、水のていこうが少ないので、流れる杉の木にまたがって、愉快でたまらないと言ったように、右の前足をふって見せて、ニコニコ笑っていました。

しかし、くまのなか間が、いくら、しかのなか間に負けない泳ぎ上ずなけものだと言っても、このはげしいだく流にのまれてしまっでは、どんなに泳ぎのうまい父ぐまでも、思うように泳ぎ切る自信がありません。

それで、父ぐまは、

「水をあなざると、ひどい目にあうぞっー子ぐまなんぞここで落ちたら、二度とふたたびうかび上れんからー」

と、丸い目を三角にむいて、大声でしかりつけました。

で、ツキノワも、四本の足に力をこめて、しっかりとじりついていました。そして、しばらく

の間はげしく流されると、やがていかだ舟は、三びきのくまを乗せたまま無事に、流れのゆるい曲りくねりした川はばの広い所まで流されて来ました。

すると、ふいにツキノワが、うれしそうな声を張りあげて、

「あつ金太郎さんの畑だー」

そう言つて、左岸に見える丘を指さしました。

だが、この岸を、左にそつて回れば

「すぐ滝だつ」

と、思つたくまの両親は、自分達親子に恐ろしい危けんの、だんだん近づいていることを知つて

父ぐまは、心のうちで、神様においのりしました。また、母ぐまも、口の中で、お念仏をとなえしました。

今は神仏におすがりするより外に助かるすべがありません。そして、ただそのご加護を信ずるばかりです。

ところが、子ぐまのツキノワは、あん外平気で、金太郎の家の方へ、だんだん近づいて来ると、せのびするようにこしを上げて、前足を手のようにふつて

「金太郎さんー！」

と、大声に呼んでみました。

すると、すぐ、

「金太郎さんー！」

とこだまが、帰って来るのと同時に、

「ツキノワかー！」

金太郎の声が、曲り角の向こうから聞こえて来ました。

「あつ、金太郎さんだ。金太郎さんがいるー」

喜んだツキノワと両親が、短い首を出来るだけ高く上げて、下手の方をみるとー金太郎が、流れの曲りかどの向こうで、滝のま上につき出た大きな岩の上に立って、真けんな顔をして、とく意のかけなわをかまえていました。

「これで、助かったー」

みんなそう思ったものの、父ぐまは、すぐその後から、心の中に、また、心配がわいて来ました。た。

そうです。この気持は、金太郎にしても同じです。今度の流木は、ただの流木ではありません。

ツキノワ親子が、乗っている杉の木、いかだ舟です。どうしても助けなければなりません。いくら、とく意のかけなわとは言いながら失敗すれば、なかよしのツキノワ親子が、深い滝つぼに落ちておぼれてしまうかも分かりません。

で、金太郎も、心で神様にご加護を願いながら、一心こめてのかけなわを、じーつとかまえて、こきゅうをはかって待ちました。

が、その間もないほどに、すぐ目の前へ、杉の木が流れて来ました。そして

「あつ、落ちるー」

と親ぐま達が、全身の毛を、一本残らずきかだたせた時、

すうーつと、かけなわが飛んで来て、へびが大口を開いて、え物に飛びついたように、ガクツと、ツキノワと一しよにいかだ舟、いや、杉の木の枝をとらえました。

が、そのはずみで、杉の木は、ぐるっと白いうずをえがきながら大きく向きを変えると、二ひきの親ぐまのしがみついている重い方が、滝の上から滝つぼの方へ、ぐっとつき出てしまいました。

「しまったー」

そうつぶやいた金太郎が、あわててなわを手もとへたぐり寄せようとした時、どっと波打って来た大波のために、あつと言う間もなく、くまの両親は、高い滝の上から深い滝つぼの中へ、大きな水音をひびかせて、まっさかさまにたたき落とされてしまいました。

で、金太郎は、すぐ岩かどに、かけなわのはしをもやいつけて、ハラハラさせられながら乗り出すようにして、ゴーゴーだく流の落ちる滝つぼをのぞきこむと

泳ぎ上ずな親ぐま達だけあって、心配する間もなく、しばらくすると水底から、ブクブクブクツと白い水あわを立てて、ぽっかり二ひきとも水面にうかび上って来ました。そして、フーと大きな息と一しよに、きりのように水をはき出すと、ぶるぶるぶるっと元気に二、三度身ぶるいしから、こちらがわの岸へ向ってゆうゆうと泳ぎ出しました。

